特251
974

文三ノ一

詩と教化

東洋大學教授
文學博士
加藤虎之亮

始

特251
974

詩と教化

文學博士 加藤虎之亮

昭和十九年一月

目次

一　詩の字義……一
二　詩と歌舞……三
三　思無邪の意義……五
四　温柔敦厚の教……七
五　詩の六義……一〇
六　詩の六德六語……一三
七　詩と興觀……一六
八　詩と羣怨……一九
九　詩と孝悌……二四
一〇　詩と忠君……二七
一一　詩と外交……二九
一二　詩と自然……三六
一三　結語……三五

詩と教化

一　詩の字義

詩とは何ぞ。說文解字に「詩志也。从言寺聲。」三上言部といひ、誌を其の古文としてをる。誌は「从言出聲」であつて、其の字義は出から出る。出は說文に「出也。象艸過屮。枝莖益大。有所之。一者地也。」六下屮部とある。植物が地上に生じ、枝が順次左右に出て行く意を見はす。楷書は之に作る。されば誌とは心が行いて言となつたものである。「志也」の志は說文に「意也。从心出聲。」十下心部とあつて、其の義は出から取る。されば心の之く所志であり、形はれて言となれば誌である。詩序に「詩者志之所之也。在心爲志。發言爲詩。」とあるのがそれである。志は內に在り誌は外に在り、同音にして意も亦通ずる故、「誌志也」と訓じたのである。虞書にも「詩言志」舜典篇と見ゆ。これが誌卽ち詩の本義である。

詩の字は寺から義を取る。寺は說文に「廷也。有法度者也。从寸出聲。」三下寸部とある。廷は說

文に「朝中也。」（二下 乙部）といひ、漢書の注に「凡府庭所在。皆謂之寺。」とある如く役所をいふ。よつて周代に大師が民間の詩を採り、其の美惡を別つて教化に資したが、其の取捨は官が專ら行つたので、「法度の廷」の意なる寺を以て出に代へ、詩字を作つたなどの說も起つた。されど顧炎武が「三代以上。凡言寺者。皆奄豎之名。自秦以宦者任外廷之職。而官舍通謂之寺。」（日知錄卷二十八節錄）といへるによれば、詩の字は秦漢以後の新字とせねばならぬから、上の說には從はれぬ。詩の毛傳（大雅瞻卬）に「寺近也」とあり、廣雅釋詁に「侍近也」とあり、秦風車鄰の「寺人」を一本「侍人」に作るので、孫詒讓は「寺侍互通（周禮正義卷一）」と說いた。俞樾は進んで「按寺卽侍之古文。人部。侍承也。凡言侍者。皆承奉之意。故古文作寺。从寸猶从又也。又部曰。又手也。」（兒笘錄第一）の如く寺を侍の古文とし、承奉の意であると主張した。林義光は「寺古作𡴀。从又从出。本義爲持。又象手形。手之所之爲持也。之亦聲」。（文源卷十）と斷じた。俞は寺の下部の寸は又（手）と同義とせるに、林は金石文に據つて、寸は又であるとし、寺の本義は持であると斷じた。さて寺に近・侍・持・承の四訓があるとして、その四訓が詩と如何なる關係があるか。孔穎達は「內則注云。詩之言承也。春秋說題辭云。詩之爲言志也。詩緯云。詩者持也。然則詩有三訓。承也。志也。持也。作者承君政之善惡。述己志而作詩。爲詩所以持人之行使不失隊。故一名而三訓也。」（毛詩正義）といひ、成伯璵は「詩含神霧云。詩者持也。在於敦厚之敎。自持其心。諷刺之道。可以持邦家者也。鄭玄云。詩者承也。政善則下民承而讚詠之。政惡則諷刺之。梁簡文云。詩者思也。辭也。發虛在心謂之思。言見其懷抱者也。在辭爲詩。在樂爲歌。其本一也。」（毛詩指說）といへるが、此等は詩字の轉訓を以て詩の原義を解せんと試みたもので、共に牽合の嫌を免れぬ。結局古文の誌に從つて解するのが妥當と思はれる。

二　詩と歌舞

詩は志が言に形はれたる者である。卽ち人の感情が言語に發露した者である。人類は喜怒哀樂の情を有たぬ者はない。平正の心境を發表するには平常の語で足りるが、亢奮せる氣分、激發せる感情を發表するには、それに相應したる言語を用ゐねば滿足出來ぬ。詩序に「情動於中。而形於言。言之不足。故嗟歎之。嗟歎之不足。故永歌之。永歌之不足。不知手之舞之。足之蹈之也。」とある如く、平言にては情を形はすに足らず。よつて咨嗟歎息する。咨嗟歎息しても足らぬから聲を引いて長歌する。それでも足らず、覺えず手舞足蹈するに至るといふのである。平正の思想を形はしたる平直の語は詩とは言はれぬ。詩は必ず長歌し舞蹈に合する者でなくてはならぬ。

卽ち其の語呂がよく句調が諧ひ、誦して口に適ひ、聽いて耳に快く、絲竹に合し鐘鼓に協ひ、步趨に順ひ周旋に中る者たるを要する。是れ詩が歌樂及び舞蹈と不離の關係にある所以である。かくて詩には平仄韵脚等を吟味することが自然に起る。天地萬物も其の平を得ざる時は必ず鳴る。試みに海濱に立ちたりとせよ。春光和煦、麗日無風の時は積水熨したるが如く、岸上の列樹眠れるが如くであるが、若し氣壓に平衡を失ふ處が出來ると、忽ち一陣の强風を起し、重疊せる波瀾は時ならぬ鼓を奏し、鬣を振ふ萬松は無絃の瑟琴を鼓する。是れ平正を失つた天地の情が外に形れたる者と見られ、自然の詩歌音曲である。所謂天籟・地籟である。又樹蔭に和鳴する春禽は喜樂の情を敍し、叢裏に合唱する陰蟲は悲哀の曲を奏する。孤鶴は天空に舞ひ羣魚は水中に躍る。無情と思はるる萬物でも此の通り長歌舞蹈する。況や多情多感の人類にして、かかる環境の裡に生活するからには、之に劣らぬ詩歌音曲がなくてならぬ。古の孝子が其の父母の禽獸に食はるるを見るに忍びず、彈を作つて之を守つたが、其の至性が彈歌八字の詩となつた。堯時の康衢順則の謠、虞廷の元首股肱の歌など、短篇ではあるが立派な詩である。總じて文化の未だ發達せぬ時代は、敦樸の情があつても發表が思ふに任せぬため、片言隻語を綴り纔に短篇を成すに過ぎず、其の聲音も後世の如く諧和ではないが、音曲に合せ舞蹈したものと思はれる。擊壤歌の傳への如きは其の間の消息を知るに足りよう。詩が大に人を動すのは歌舞するによる。歌舞を伴はぬ詩は感化の力が乏しい。詩序に「情發於聲、聲成文。謂之音。治世之音。安以樂。其政和。亂世之音。怨以怒。其政乖。亡國之音。哀以思。其民困。」とある。感情其の物が直ちに詩に形はれる。その歌謠を樂人が取り、播して音樂とする。辭は是なるが意の非なる者や、言は邪なれど志の正しき者などがある。音樂に通達せる者は之を曉つてをるので、大師が樂に被らす時には、能く作者の本情を知つて、それに相應する曲譜を作る。故に治亂興亡の政治が如實に歌詞となり音樂に播し、或は安樂に或は怨怒に或は哀思となるのである。政治の得失は民情に影響して詩歌となり、更に音樂となつて直接敎化に關係する者である。爲政者は吳々も注意せねばならぬ。

三　思無邪の意義

本論文に詩と敎化と題したが、その詩は毛詩三百五篇を指す。詩は喜怒哀樂の情を言に形はした者であるが、毛詩の作者は如何なる心持で詩を賦したか。論語に「子曰。詩三百。一言以蔽之。曰。思無邪。」爲政篇とある。毛詩は三百十一篇あり、其の六篇は題のみで詞は亡びたから、三百五篇であるが大數を取つて三百といふ。一言、は古書の用法に「一字」「一語」「一句」の三義あるが、

こゝは一句の意である。蔽は「當」「斷」「蓋」等の解があるが、蓋ふの義に從ひたい。即ち毛詩三百五篇は多種多様であるが、思無邪の一句で概括することが出來るといふのである。思無邪とは如何なる意か。これは毛詩魯頌「駉」篇の字面を用ゐたのである。「駉」の詩は序に據れば魯の僖公を頌したもので、僖公が其の祖伯禽の法に遵ひ、儉以て用を足し、寛以て民を愛し、農を務め穀を重んじて、坰の野に牧したので、魯人が之を尊んで作つたといつてをり、其の詩は四章より成り毎章八句ある。其の末章の七八句に「思無邪。思馬斯徂。」とある。鄭玄箋に「思遵伯禽之法。專心無復邪意也。牧馬使可走行。」と解してをる。即ち思は僖公が思慮するのである。邪字を解せぬが、專心を以て無邪を解してをるから、邪意は「他念」「餘念」などの意であらう。思字を吳樹聲（詩小學）鈴木朗（論語參解）等は牧人の思と解し、王質（詩總聞）等は辭也即ち助辭と解したが今從はぬ。邪に就いても諸家區々の說があるが、正の反と解する說には從ひ兼ねる。吳樹聲は古書に邪とあるは餘字の借用で、無餘とは無他にて馬を牧して牧の外に思ひ及ばぬことだといひ、竹添進一郎（毛詩會箋）は他意なきを言ふと解したのが鄭箋にも合し、從ふべき說と思はれる。邪は說文に據れば、琅邪郡の地名に用ゐたのであるが、衺正の衺の字に通用した。衺は說文に「从衣牙聲」（八上衣部）とあるから、其の義は牙から取る。牙は「牙壯齒也。象上下相錯之形」（二下牙部）とある。上下の齒が互に交錯するに象り、物事が純一ならず入り亂れる意味を生ずる。されば衺にも多くの物が入り亂れて純一ならぬ意がある。衺の借字なる邪には「不正也」「曲也」「方直不曲謂之正反正爲邪」「前正而後有枉者、謂之邪道」「僻也」「私也」「僞也」「姦術也」「謂寒氣」「言非正氣也」「餘分也」「謂邪辟」「謂邪惡」「謂惡逆之事」「凡物不以其道得之則邪也」「讀爲斜」「邪作徐」等の諸解が施されてをる。其の用處によつて異なるのである。純一無二のものは正であり、反對に犬牙錯綜して雜然たるものは衺卽ち邪である。形の上でいへば正の反は「曲」「枉」であり、方向からは「斜」「僻」であり、道德上からは「惡」「逆」「私」「僞」「姦」であり、性質の上からは第二義的のものなれば「餘」「徐」である。然らば上述の諸解は皆連貫的關係あることが判る。

孔子が「坰」の一句を以て詩三百篇を包括されたのにつき、蘇轍は此の詩の作者は、必ずしも深意を知つてゐたのではない。孔子が之を讀んで其の心に會するあつて、之を取られたので所謂斷章取義だといつたが、後儒は多く此の斷章說に贊同してをる。即ち論語に對しては詩とは別の解をするのである。その諸說を二三擧げると、包咸（論語集解引）は「思無邪」は「正に歸する也」と解し、皇侃（論語義疏）邢昺（疏）は此の章を爲政の道を言ふとなし、邪は更に「詩の體たる僻を止め邪を防ぎ、大抵皆正に歸す」といつてをる。程頤（論語精義引）は「思無邪」は「誠

也」と釋した。安井衡（論語集說）も「淫奔暴虐の辭多く、不正の者あるが如くなれども、詩人の思を原ぬれば、常に憂世傷俗の誠に出づ」と說いた。尹焞（論語精義引）は「詩三百篇、美惡怨刺の不同あれども、その旨は一言にて蔽ふべし」といひ、張栻（南軒先生論語解）之を承け、「その言の發するは皆惻怛の公心より出でて他あるに非ず。故に「思無邪」の一語以て之を蔽ふべし」といひ、呂祖謙（文獻通考引）も作詩者を主として說き、詩人が無邪の思を以て作つたから、學者も無邪の思にて讀むべしと斷じた。然るに朱熹（論語集注）は「凡そ詩の言善き者は人の善心を感發すべく、惡しき者は人の逸志を懲創すべく、その用は人をしてその情性の正を得しむるに歸するのみ」と斷じた。詩には善もあり惡もあり、淫奔の事は邪惡である。されば有邪の思で作つても、無邪の思で讀まねばならぬとするので、「或問」や「語類」などに之に就ての論が多く見えてをる。卽ち「思無邪」は作詩の義を說けるに非ず、詩を誦する人の心得を說いたと見るのである。張振淵（四書說統）は朱・呂二公の說を未了の公案と說き、于英本（論語訓蒙瑣言）等は「思は作詩人と讀詩人とを兼ねる」などの折衷說を出したが、顧鎭（虞東學詩）が「論語の詩を言ふ獨り詳にして、誦といひ學といひ爲といふは、皆詩を誦する者を主とすれど、ただ詩三百といふは、詩を論じたるにて詩を讀むを論ずるに非ず」といひ、又「作詩の人に繫けて讀詩の人に繫けざること坦然として明かなり」と斷じたのが鐵案で、我國にもかかる說を主張せる人が多い。されば郝敬（論語詳解）の「詩三百篇は大要美刺の二端を越えず。善を美め惡を刺るは、ただ人が其の心を正し、邪に入ること勿らんを欲するのみ。善く詩を學ぶ者は、無邪の思を以て作者の志を逆ふれば、三百皆正言なり」といひ、劉寶楠（論語正義）は「俗に淳漓あり、詞に正變あれど、夫の作者の初を原ぬれば、感發懲創の苦心に發す」といへるは、共に作者が教訓を垂れる考で作つたと見たのであるが、その說には從はれぬ。又朱熹の「變風に淫奔の詩多く、淫は邪の甚しきものなれど、之を存したるは讀者をして懲創せしめんがためなり」と斷じたのに對し、黃式三（論語後案）王廷植（四書疑言）黃鶴（四書異同商）等は之を駁し、若し淫詩ならば却つて人の淫心を誘發して懲創など思ひも寄らずと主張し、又思の邪なる者と、思の知るべからざる者とは孔子が皆刪り、その存する者は皆無邪なりと說き、荻生雙松（論語徵）は邪を奇衺の衺とし、奇功を務めて先王の道を踰ゆるものと說いてをる。是等の諸說は俱に從ひ難い。

豐島幹（論語新註）は「思無邪」を「情實無僞」と釋し、「詩には善辭美句、淫溺惑亂の語あり、作者の志合自同じからねど、心の感じて發する所は、善惡共に己の情實を吐露して僞なし」といひ、米良東嶠（論語纂註）は「詩を作る者、美刺怨怒皆其人感興の致す所、眞情呈露して矯飾

をなさず、邪慝あるなし」といひ、二說共に眞情をありのまゝに表すことと解した。之を更に徹底的に說いたのは堀景山（不盡言）である。其の說の大要に「思無邪の邪は邪惡邪佞などの意にはあるまじ、邪行邪視又は邪幅などいへるの邪字の義にあるべし、元來邪字の音義に斜の字あれば、斜の意が邪の本義にして、字註にも不正也とあるゆゑ、惣じて物の横すぢかひになり、眞ろくになき意味の字にて正の反也、正の本義も、何にても物の眞すぐにてちやうどろくなる意味にて、正立、正坐又は正午。正東・正面などいへる類が正の本義なり、その意義を働かし、轉じて人の心の質直にて善きことに用ひ、正心正己正言などいへることなり、然れば邪行邪視などいへる類の邪の字が元と邪の本義にて、轉じ働かして、人の横すぢに曲りて惡きことに用ひ、邪佞邪曲などといへることなり、人の邪念より出ぬ詩をよしとするは勿論なれど、三百篇の內には、邪念より出る詩も多くあること也、心の內に按排工夫をめぐらし、邪念を吟味して、邪念より出ぬやうに一しらべして出來たるものは、詩にてはあるまじきと思はるゝ也、只その邪念なり、正念は正念なり、我しらずふつと思ふとほりを云ひ出すが詩と云ものなるべし。その詩を見て邪念より出ると、正念より出ると云ことを知り分つは、それは詩を見る人の上にこそあるべけれ、詩といふものゝ本體にてはなきこと也、詩を作り出す人は邪正はかつて覺えぬ也、それゆゑ詩と云ものは恥かしきものにて、人の實情の鏡にかけたるやうに見ゆることなれば、善惡邪正ともに、人の內にひそめたる實情のかくされぬものは詩にあることなり、聖人人に人情の色々樣々なるを知らさん爲めに、詩を集め書として讀せらるゝに付て、思無邪の一言を借つて、元來の詩と云ものゝ本義を解釋なされ、三百篇ある詩は此の一言で以て、詩の義は此內に蔽籠との玉ひしことなるべし」といひ、鈴木朗（論語參解）は「邪は正の反なり、但し此邪は斜と同じく、筋かひ也、是に反したる正は正南面の正にて、脇へはなれず、まさしく眞向なるを云、無邪と云ふ卽是なり、詩には思無邪、思馬斯征とありて、君より預りたる馬を牧ては、他事をば思はず、ひたすらに駿足になれかしと願ふのみ也、といふ意なり、此思無邪の一言、卽ち三百篇の總評たるべしと也、其故は、詩はもろこしの歌にして、歌の出來る本は、嬉しきにも悲しきにも、一筋にせめて思ひあまる人情より出たるものなること、何れの國も同じことなれば也」といひ、仁井田好古（毛詩補傳）は「思無邪は性情を謂ふ、性情は天に受けたるものなれば正なり。其の邪あるは常を失へるのみ。詩の作者は皆聖賢の徒なれば、世の盛なる時は善を善とし美を美とし、德を歌ひ化を詠ず。其の衰ふる時は邪を閑ぎ非を格し、惡を刺り失を諷し、怨むべきを怨み惡むべきを惡み、性情の眞に發して其の常を失はず、豈に矯揉僞飾あらんや」といつてをる。此等の說は

大同小異で共に傾聽すべき點が多い樣に思はる。

孔子が詩の句を引用せるを諸家多く斷章取義と解したが、「思無邪」の義は論語にても詩の意と大に似通ふ所があつて、鄭箋の說は移して論語の解とすることが出來る。卽ち心を專らにして復た邪意あるなしといふのである。邪は餘の意あれば（上述）詩人が事に觸れ物に感ずるに當り、その事物に融合同化したる情緒、卽ち事物に對する純一無二の感興を如實に吐露し詠歎し、第二次的に興る感想を顧みぬのである。其の事物になりすますのが專心にして復た餘意なきことである。卽ち美を美とし醜を醜とし、善を善とし惡を惡とし、喜怒哀樂、怨恨愁歎、その感ずるままを端的に詠じて他念なきを「思無邪」と申したのではあるまいか。

四　溫柔敦厚の敎

君子は義に喩り小人は利に喩ると申す如く、同一の事物に對し同樣の境遇に臨んでも、その感ずる所は人人異ならざるを得ぬ。其の感を端的に詠ずるとすれば、その情性の善惡によつて詩にも亦美醜の別を生ずる。三百篇の作者の情性は如何であつたか、溫柔敦厚であつたといへよう。

禮記・經解篇に

孔子曰、入其國、其敎可知也。其爲人也、溫柔敦厚、詩敎也。……故詩之失愚、……其爲人也、溫柔敦厚而不愚、則深於詩者也。

とある。六經の敎化に對する效果を述べたものであるが、他の五經の事は玆に必要がないから省略した。詩敎の結果は人人を溫柔敦厚ならしめる。併し其の缺點は愚に陷り易いから、大に警戒せねばならぬと申してをる。孔穎達は

溫謂顏色溫潤、柔謂情性和柔。詩依違諷諫、不指切事情。故云溫柔敦厚是詩敎也。

と申してをる。卽ち顏色と情性と發表の方法とに分說したのである。思中にあれば色外に見はれ、更に言語詞章に發するものであるから、この三者は一貫相依の關係にあるが、かく分說すべきものか疑問である。陳祥道は

以詩之作、或美或刺、其言皆溫潤優柔而不迫、而其意畢歸於忠厚故也。講義

といひ、溫柔を言に敦厚を意に當てて解した。劉彝は

詩有諷有刺、不諂不傷。是直而能溫、柔而能立也。有頌有美、止於禮義、無過美也、無虛頌也。是敦厚也。禮記中義集說引

と解してをる。詩に諷刺と頌美とあるが、その仕方が諂はず傷らざるは溫柔であり、過美虛頌せ

ぬが敦厚であるとし、而も溫柔をば泉陶の九德なる「柔而立、」「直而溫」を引いて解してをる。俱に迂曲にして的確ならぬ憾を免れぬ。葉夢得は

詩之規刺嘉美、要使入歸於善而已。仁之事也。故其教則溫柔敦厚也。（禮記集說引）

と說いてをる。此等の諸解は溫柔敦厚の字義は明瞭なるものとして說かず、それが外に働く影響を以て解したものである。溫柔敦厚は人の情性をいふのであるから煩瑣に亙るが、その字義から說明しようと思ふ。

溫は說文によると、「溫水出犍爲符、（涪）南入黔水。从水盥聲。」（十一上水部）とある。卽ち溫は四川省に在る川の名である。段玉裁が「今以爲溫煖字。許意當用盥爲溫煖。」と解した如く今日では、「アタタカ」の意に用ゐられてをるが、その原字は盥である。盥は說文に「盥仁也、从皿臼食囚也。官溥說。」（五上皿部）とある如く、囚と皿との合字で、皿を以て囚人に食事さす意である。これ「仁也」の解が出る所以である。段注に「凡云溫和・溫柔・溫暖者、皆當作此字。溫行而盥廢矣。」とある。卽ち今日用ゐらるる溫の本字は盥で、盥は囚人に食を與ふる仁心をいふ。囚人は惡事を行へる者で、常情としては惡むべきであるが、それに食事を與ふるは如何にも溫き心と申さねばならぬ。それが原義である。よつて「溫煖也。」（廣雅釋詁）「善也」（同上）「讀如煇溫之溫。」（禮記鄭注）「柔也。」（王肅詩註）「和柔貌。」（詩經毛傳）「寬柔也。」（同上）「顏色和也。」（毛詩鄭箋）「柔和也。」（同上）「柔暢謂之溫。」（論語義疏）「潤也。」（同上）「和順也。」（同上）「厚也。」（漢書註）「猶足也。」（荀子註）「籍也。」（禮記鄭註）など、用法によつて諸解を生ずるが、皆原義と關聯あることが判る。

柔は說文に「柔木曲直也。从木矛聲。」（六上木部）とある。段注に「洪範曰、木曰曲直。凡木曲者可直、直者可曲曰柔。考工記多言揉、許作煣、云屈申木也。必木有可曲可直之性、而後以火屈之申之。此柔與煣之分別次弟也。」とある。生木の軟靱にして或は曲げ或は直くし、屈伸自在にするを得るを柔といふ。槁木は枯燥硬直にして撓めんとすれば忽ち摧折する。我見を持して人言を容れず、人と衝突し勝ちなるは槁木に類し柔の反である。己を虛しうして人に從ひ、衆に和し物に逆はず、反抗の心扞格の風なきが柔の原義である。引伸して「柔安也。」（爾雅釋詁）「弱也。」（廣雅釋詁）「性行和柔。」（尙書鄭註）「和柔」（禮記疏）「猶濡毳也。」（毛詩鄭箋）「仁也。」（國語韋註）「脆也」（同上）「潤也」（同上）「順。」（公羊傳何休註）「和也。」（後漢書註）「軟也。」（史記正義）等の義を生ずる。溫と通ずる所が多い、故に溫柔と熟する。溫柔とは「アタタカミ」あつて、陽春が萬物を長養するが如く、「ウルホヒ」あつて慈雨の草木を繁茂せしむるが如く、「シトヤカ」にして物に逆はず、己を虛しうして人と諧和する情性をいふ。內にこの情性あつて自然に外言行に表はれるのである。

敦は說文に「敵怒也、詆也。一曰、誰何也。从攴臺聲。」三下攴部とある。敦の原字は敵で怒詆の意である。敦厚の敦とは似もつかぬ字である。段注に「按心部、惇厚也。然則凡云敦厚者、皆假敦爲惇。此字本義訓責問、故從攴。」と解してをる樣に敦厚の敦は惇の假借字である。然らば惇は如何なる意か。說文に「憞厚也。从心臺聲。」十下心部とある。惇は厚也の意がある。臺の聲であるから、義は臺から取る。臺には如何なる意あるか。說文に「臺孰也。从高羊。讀若純。一曰鬻也。」五下高部とある。段注に「今俗云純熟。當作此字。純醇行而臺廢矣。」と解してをる。臺は純醇と同意義であるが、今は用ゐられぬ。辨字正俗に「絲部曰。純絲也。論語曰。今也純。儉。酉部曰。醇不澆酒。按臺卽今云純熟字、俗通作純。純本爲絲。亦借爲醇字。詩純亦不已。易純粹精也。崔覲注不襍曰純、是也。凡酒不襍以水曰醇。故爲醇學字、亦爲醇襍字。今臺久不行。惟通用純醇二字。」とある。臺は純・醇と同意で、純は本は絲の義なるが粹美不雜の意がある。醇は酒の生一本にて水を雜へぬもの、二字共に純粹無雜の意である。然らば敦の本字たる惇の聲を取れる惇は純粹・無雜であるから、惇も其の意を享けてをる。さて臺は高と羊との合字である。羊は說文に「羊祥也、从丫、象四足尾之形。」孔子曰、牛羊之字以形舉也。」四上羊部とある。羊の形に象つた字で「祥也」が其の意義である。羊は柔順で物に和するからである。隨つて造字の上で善い意に用ゐらる。祥・善・美・羣・義等皆羊に從つてをる。されば臺も善良な意があるのは當然である。然らば高には如何なる意あるか。說文に「高獻也。从高省。曰象孰物形。孝經曰、祭則鬼高之。」五下高部とある。高は古と曰との合字で、古は高の上半、⊖は熟物を器に盛りたる貌、獻ずる物は必ず高く奉げる。熟物を神に薦める時に高く捧げるに象つた字である。轉じて薦める熟物卽ち飪物の意となる。亨又は烹がそれである。神に薦める誠意が神に通ずる、そこで享くの意が出る。高・亨・烹・享皆同字異形である。周禮では祭高の時は高字を用ゐ、饗燕の時は饗字を用ゐてをるが、經書によつて多く享・饗を混用してをる。かくて高は神に物を獻ずる字で、誠意を籠め敬虔の情を竭すのであるから臺にも憞にも其の意が傳はつてをることが判る。因にいふ金石文には高を高に作つてをるのが段段見える。宗廟の形に象つたものと思はる。之に從へば說文の解とは別にせねばならぬが、姑く說文に從つておく。

厚は說文に山陵之旱也、从厂从𠫑。厂古文厚。从后土。」五下厂部とある。段氏は「𠫑亦聲」と解してをる。厚は厂と𠫑とより成る。厂は說文に「山石之厓巖。人可居。象形。」五下厂部とある。卽ち厓が横に突き出て、其の下に人が居住することが出來る樣になりたる處であるから、山陵の意を生ずる。されば厚の意は𠫑になくてはならぬ。說文に「𠫑厚也。从反高」五下𠫑部とある。反高の解

には諸說ある。說文繫傳は「臣鍇曰、言者進上也。以進上之具、反之於下則厚也。厚下易博厚配地、君子以厚下安宅。」と解し、段氏は「倒言者、不奉人而自奉、旱之意也。」と解し、文始には「從反言謂上賜下也。」と解した。繫傳及び文始の解は一脈通ふ所がある。今其の解に從ひおく。徐灝が「旱厚古今字。以厚釋旱者。以常言易曉之字釋所難知。亦同字相訓例也。依許義凡篤厚・敦厚。本作旱。物之厚薄則作厚、今通用厚矣。」と解した如く、旱は厚の古字である。厚薄の義には厚字を用ゐ、篤厚・敦厚の意には旱字を用ゐたのである。厚には「重也。」（戰國策註）「重慎也。」（禮記鄭註）「猶遠也。」（同上）「多。」（呂覽註）「深。」（同上）「大也。」（國語註）「益也。」（同上）「猶彊也。」（同上）「至也。」（老子註）「謂豐厚。」（禮記孔疏）等の諸解がある。即ち敦厚とは純粹無雜にして情厚く、「コンモリ」としたる心根であつて、輕薄にして上滑りし、冷酷にして苛虐なるの反面である。されば溫柔敦厚は先儒も言へる如く仁に歸著する。詩人の情性は上述の如く溫柔敦厚を兼ねたるものであるから、其の作品にはこの情性が流露してをる。夫故これに依つて敎育された者は溫柔敦厚の風になる。詩の敎は純情の陶冶である。情を主とすれば物に對して必ずしも深く情僞を察せぬから、其の缺點は愚に陷り易い。即ち過厚の仁である。孔子が「仁を好んで學を好まざれば其の蔽や愚。」（論語陽貨）といへる如く、仁即ち情に厚くして學即ち智に薄い弊である。其の弊に流れず、純情にして而も明智なるは詩敎の心髓を得たるものである。

試みに三百篇に就いて見ると溫柔敦厚の詩は非常に多いが、其の一斑を擧げて全豹を知ることにせう。國風周南十一篇は文王・后妃の德がその子孫宗族を感化せしめた事を歌つたものであるが、「關雎」に始まり「麟之趾」に終つてをる。その麟之趾は

麟之趾。振振公子。于嗟麟兮。麟之定。振振公姓。于嗟麟兮。麟之角。振振公族。于嗟麟兮。

である。振振は「仁厚の貌」と解してある。公子・公姓・公族が皆仁厚で麟の如くなるをいふ。麟は仁獸にて其の足趾は生草を踐まず、生蟲を履まず、獸の定は敵に打ち當つべき樣に出來居れど麟は爾せず、角あれど尖端に肉ありて物を害する用をなさず、唯威儀を具ふるに過ぎぬ。此の如き仁獸に比すべき人人なりと頌したもので、溫柔敦厚の至と申さねばならぬ。詩序に「麟之趾は關雎の應なり」とあるから、文王・后妃の德化の致す所と見たのである。次の召南十四篇は「鵲巢」に始まり「騶虞」に終つてをる。南國の諸侯が文王の化を被り、正心・修身・齊家が出來、其の女子は后妃の化を被り、專靜純一の德あるを敍してをる。その「騶虞」の篇は

彼茁者葭。壹發五豝。于嗟乎騶虞。彼茁者蓬。壹發五豵。于嗟乎騶虞。

の如くである。「壹發五豝」は難解であるが、五獸に對して壹射する意にて、盡く殺すに忍びざる

仁心の見はれであるとの舊解に從ひたい。國君の庶物に對する仁心は、義獸驚虞の生物を食はざるに似てをるから比況したのである。當時國君たる者は四時田獵して農のために害を除き、兵を習はし武を講じ、又祭祀に供する鮮を獲る必要上狩獵はするが、興味を滿足させたり獲物の多からんことを貪ることなく、禽獸を取り盡す樣のことはせぬ、是れ仁心である。二南は國風の正であつて孔子も口を極めて稱揚せられたが、其の終篇が共に仁獸義獸に比況して、宗族なり諸侯なりを敍してをるが、溫敦の情が廣く行き渡つたことを見るに足るのである。召南の「甘棠」は召伯が甘棠の下に舍つたので、後人が其の德を懷ひ其の樹を愛して傷くるに忍びなかつたことを謠つたものである。

蔽芾甘棠。勿翦勿伐。召伯所茇。蔽芾甘棠。勿翦勿敗。召伯所憩。蔽芾甘棠。勿翦勿拜。

召伯所說。

其の人を懷うて其の遺愛の樹を尊重し、相警めて損傷せざらんことを期するは如何にも美しき心であつて、溫敦の至と申すべきであらう。豳風「七月」の篇は周の先代の國したる豳に於ける農民の狀態を周公が追敍したるものと傳へられてをるが其の中に

八月載績。載玄載黃。我朱孔陽。爲公子裳。

一之日于貉。取彼狐狸。爲公子裘。二之日其同。載纘武功。言私其豵。獻豜于公。

とある。麻を績ぎ之を色色に染め、其の朱色殊に鮮かに出來たるをば公子の裳に獻じ、狐狸を獵しては公子の裘を作り、猪を獲ては其の大なるものを公に獻ずる。是れ上に對する溫敦の情である。小雅の「大田」は農民の狀を述べたるものなるが、その第三章に

有渰萋萋。興雨祁祁。雨我公田。遂及我私。彼有不穫穉。此有不斂穧。彼有遺秉。此有滯穗。伊寡婦之利。

とある。當時井田の法により八家各百畝の私田を耕し、其の中央の公田八十畝を八家共力して耕し、その收穫を公租として納めた。盛暑炎天の候、禾稼雨を欲する時、一天渰として雲の興るあり萋萋と盛に擴がり、續いて甘雨徐徐に降り來り、先づ公田を潤してそのお流が私田にまで及んだのは何たる難有き事ぞと感謝したのである。この公を先にして私を後にする心が愛づべきではないか。更に收穫時に及べば全部を穫り盡さずして、彼處には刈らざる穉禾あり、此處には收斂せざる穧束あり、彼方には取り遺したる禾秉あり、此方には取り落せる禾穗あり。此等は同情すべき寡婦達の落穗拾ひの料に殘して置かうといふのであるが、溫柔敦厚も此處まで進むと評する詞に窮する。第四章に

曾孫來止。以其婦子。饁彼南畝。田畯至喜。來方禋祀。以其騂黑。與其黍稷。以享以祀。以介景福。

とある。曾孫とは領主たる卿大夫をいふ、領主來る時、農夫等其の婦女子供と農園に行き、齋し來れる辨當を開いて收穫に努むる壯夫等と團欒の裡に滿喫し、折柄來會せたる農事指導者も大喜びである。引續き領主が精神を籠めて四方の神を祀り、或は赤色(南)或は黑色(北)の犧牲(東西は推知すべきを以て略す。)と黍稷とを供へて報賽祈禱をする。農夫等は領主の大福を受けられんことを祈るといふのである。この「大田」の詩は四章より成り、首章は農事を重んじて領主を悅ばせ、第二章は領主の德に賴つて禾稼が成長してをる。願はくは田祖の神によつて害蟲を驅除せんことを祝したのである。これは農民が領主に對する溫敦の情であるが、「大田」の直前に載せたる「甫田」の篇は君主が農民に對する溫敦の情を述べたるものである。

倬彼甫田。歲取十千。我取其陳。食我農人。自古有年。

は其の首章の上半五句である。十千は一萬畝のことで、それだけの公田を食む公卿が其の舊穀を散じて農民を養ふを敍す。第二章は君主が后土や四方の神や田祖を祀り、甘雨を祈り五穀豐穰にして農夫の慶福あらんことを乞ひ、以て民人を養はんことを祈願するを述べ、第三章には

曾孫來止。以其婦子。饁彼南畝。田畯至喜。攘其左右。嘗其旨否。禾易長畝。終善且有。曾孫不怒。農夫克敏。

とある。上四句は「大田」と同一である。君主が農夫の食事の處に臨み、其の左右の饋を取つて其の旨いか否かを試食するといふので、上下相親むの甚しいことが判る。又穀物が治まつて畝に竟ること一面であるから、結局嘉穀豐穰なることが察せらる。かくて君主は怒らず農夫は益〻其の仕事に勤むるのである。第四章は豐年で穀物が丘陵の如く積まれた。千倉を求めて之を貯へ、萬車を求めて運搬する。此の如く黍稷稻粱を多く得たるは農夫の慶に賴つたものであるから、報ゆるに大福を以てし萬壽疆りなからしめたいものだというてをる。卽ち美を下に歸し福壽が民の上に降らんことを祝禱してをるので、上たる者が下に對する溫敦の情を見ることが出來る。この溫敦の情が君臣上下交流する狀は、小雅・大雅に於て顯著に認められる。小雅の首篇「鹿鳴」は人君が羣臣嘉賓(諸侯の使)を饗宴する詩である。「四牡」は使臣の還り來るを慰勞する詩であり、「皇皇者華」は使臣を遣る時の詩である。殊に「四牡」に於て「豈不懷歸。王事靡盬。不遑啓處。」「王事無盬。不遑將父。」「王事靡盬。不遑將母。」「豈不懷歸。是用作歌。將母來諗。」といへるなどは、使臣を思ひ遣ることの至れる者である。又「常棣」は兄弟を燕し、「伐木」は朋友故舊

を燕する樂歌である。此の五詩は人君が其の臣を燕するものであるが、それに對して人臣は「天保」九如の詩を以て、君主の福壽無量ならんことを祝禱する。第七篇の「采薇」は戍役を遣る詩、「出車」は還率を勞する詩、「杕杜」は還役を勞する詩である。出師の時は將卒同一なるに、凱旋の時に異なるは如何といふに、鄭玄は「將帥及び戍役を遣るには、歌を同じくし時を同じくするは、心を同じくするを欲するからであり、反つてから之を勞するには歌を異にし日を異にするは、尊卑を殊にするのである。」といひ、范處義は「出車」は率を勞する故に其の功を美め、「杕杜」は衆を勞する故に其の情を極む。先王は己の心を以て人の心となす故に能く曲に其の情を盡して、民をして其の死を忘れて上に忠ならしむ」と申してをるが、能く其の情を得たるものである。「瞻彼洛矣」は天子が諸侯を東都に會して武事を講じたる時、諸侯が天子を美めたる詩であり、其の次の「裳裳者華」は天子が諸侯を美めたる詞である。「桑扈」は天子が諸侯を燕する詩で、「鴛鴦」は諸侯が「桑扈」に答へる詩である。「魚藻」は天子が諸侯を燕して諸侯が天子を美むる詩であり、「采菽」は天子が之に答へたものである。大雅の「行葦」は祭畢りて君主が父兄耆老を燕したものであり、「既醉」は父兄が「行葦」に答へたものである。衞風「碩人」は莊姜が才色兼備なるに子がなく、又莊公に親厚せられなかつたのを痛んで衞人の賦したものであるが、第三章に齊から來り嫁した時の事を追敍して

碩人敖敖。說于農郊。四牡有驕。朱幩鑣鑣。翟茀以朝。大夫夙退。無使君勞。

とある。上の五句は莊姜の近郊に舍つた時、車馬の盛を極めて君の朝に入れるを以て、莊公の配偶として申分なきを喜びたるを敍し、下の二句に於て諸大夫の君に朝する者は早く朝より退下し、君をして政事に勞するために、夫人と親しむことを得ざらしめぬ樣にせよと申し合せたのである。新郎新婦に對する思ひ遣りの情が此の二句に言ひ盡されてをる。人情の機微を道破せる名句といへよう。その賢夫人が今昏惑の莊公に答へられぬとて重ねて同情して居る。詩人忠厚の深さを知るに足りよう。大雅「行葦」に

敦彼行葦。牛羊勿踐履。方苞方體。維葉泥泥。

とある。聚生せる道傍の葦をば牛羊よ蹂み躪るな。今し苞し形體も成つて、柔澤の若葉が萌え出でんとしてをるからといふのである。溫敦の情が草にまで及んだものである。實に情の濃かなるを見るのである。此の如き溫柔敦厚の情を以て事物に接し、其の感じたる所を如實に表はすのであるから、三百篇が人を感化すること偉大なることも偶然ではない。

五　詩の六義

三百篇は喜怒哀樂怨恨好愛の情を端的に表はしたものといふが、妄りに怒罵疾呼、哀號慟哭はせぬ。殊に溫柔敦厚の情に基くから左樣の事はない譯である。詩序に

上以風化下、下以風刺上、主文而譎諫。言之者無罪、聞之者足以戒。故曰風。

とある。是れ詩人發表の要訣である。鄭玄は「風化・風刺は皆譬喩して斥言せざるを謂ふ。主文とは樂の宮商と相應ずるを主とす。譎諫とは詠歌依違して直諫せず。」と解してをる。風とは微風が草卉を搖蕩し、不知不識の間に風の方向に靡かす如く、其の事を直言せず婉曲に述べて、自然に其の言に感ぜしむるをいふ。序は此の引用文の上に詩の六義（後に說明する）を擧げてをるので、在上の君子はその六義の意を以て下民を風動教化し、在下の臣民は六義の精神を以て君上を風喩箴刺し、其の刺る事を直言せずして旁譬曲喩し、詠歌依違（依るが如くにして依らず、違るが如くにして違らぬ）して斥言せず、文の主とする所は意の在る所と相違して居る樣にする。例へば邶風「簡兮」の篇は文は伶官を美むれども、實は賢人を用ゐざるを刺つてをるが如きをいふ。（鄭注は「詩人本心の主意は、宮商相應ずる文に合せしめ、之を樂に播して依違譎諫して君上の過失を直言せぬ」と解してをるが今從はぬ。）此の如くして君上の過失を直言せず、他事を假りて婉順に說くを以て、君上の忌諱に觸れて誅戮せらるる樣のことなく、而して人君自らは其の過失を知つて之を悔い改める。感ずれども切ならず、微動すること風の如く、言出でて過改まること風行いて草偃するが如くである。この諷喩的方法が最も大切である。民間の流行歌は多く政化に就いての感想を敍してをるが、多く諷刺的に述べてをる、故に風といひ十五國風がある。風諫するのに直言せず他事を假りて諷喩する時は論を竢たぬが、その事を直言する場合にも決して十分に言ひ盡さず、含蓄ある言葉遣ひをなし、言はんとする所は七八分に止め、二三分は餘韻に託することが多い、丁度麥酒を注ぐと同じで、若し「コップ」に一杯注ぐと忽ち泡立つて溢れる。八分位注げば上の二分は泡が盛り上つて一杯になる。この泡の部分が含蓄の餘韻である。飲む者杯を啣めば舌は先づ泡を味ひ、鼻は微かに其の香氣を聞き、名狀し難き妙味を覺える。次の一飲にて始めて喉を潤すのであるが、麥酒の眞味はこの餘韻の部に存するといへよう。詩も亦この餘韻を味はねばならぬ。詩は感じたる事を如實に發表すると申したが、發表の方法は色色あつて、そこが文學たる所以である。後世の如く技巧に走り雕琢を事とする弊には陷らぬが、吝嗟詠歎し長歌舞蹈するのであるから、その形式も整はさねばならぬ。ここに修辭の必要がある。詩の六義とは

これを總括したものである。

周官大師職に「教六詩、曰風。曰賦。曰比。曰興。曰雅。曰頌。」とあり、詩序には之を六義と謂うてをる。孔穎達が「風雅頌は詩篇の異體で、賦比興は詩文の異辭、賦比興は詩の用ゐる所、風雅頌は詩の成形である」と申してをる樣に、類の異なつてをる者を併せたものである。孔氏は「彼の三事を用ゐて此の三事を成す故に同稱義を爲す」と解してをるが、二者を一括して六義と呼ぶは當らぬ感がする。風は聖賢治道の遺化を言へるもの、多くは民間の歌謠で二南を始め十五國風ある。雅は正也と訓じ、王政の由つて廢興する所を言ふ。優柔委曲、意の言外に在る者は風の體、明白正大其の事を直言する者は雅の體である。純然たる雅の體は大雅といひ、風の體を雜へたる者は小雅といふ。(大序には政に大小あるので大雅小雅の別ありとあるが、之には異論が多いので從はず、嚴粲の詩緝の說を引いた)頌は誦也、容也と訓じ、盛德の形容を美め其の成功を神明に告げるので宗廟の樂歌である。この三者は出來上つたる詩を體の上から分類したものである。詩は其の述べる目的の如何によつて敍し方が違ふので、そこに體の上に自然相違を生じて來る。賦比興は作詩の際に於ける修辭上の相違をいふ。賦は鋪也と訓じ、其の事を直接鋪陳して避諱せぬをいひ、比は物に比託して敢て正言せぬもの、所謂比喩法で明比・暗比の兩樣ある。興とは志意を興起して讚揚するの辭と孔氏は解してをる。賦比は直敍法と比喩法とで疑義はないが、興に就いては諸說紛紛適從する所に迷ふが、仁井田南陽・大田錦城の說を略述する。南陽曰く、「物に感じて情を起すを興と謂ひ、物を借りて事に喩ふるを比と謂ふ。興は感發の名、比は譬喩の稱。夫れ既に物に感じ、因つて之を取つて喩ふ、故に興は比である。比の首章に在る者を興といふ。感發に取るのである。二章以下に在る者を比といふ。譬喩に取るのである。故に比と興とは義は二あれど、其の實は一である。唯首章と次章とで稱を異にするのみ。」(毛詩補傳首卷)と。錦城曰く、「賦は直に其の事を鋪陳して比喩を假らぬもの、比は他物に比喩して其の事を直言せぬもの。詩の辭此の二者を出づるなし。此の二者は兒童でも知るべし。後世の詩、花を以て花とし、美人を以て美人とするは賦、花を以て美人に喩へ、美人を以て花に喩へるは比である。此の二者は知り易い。興は名は此の二者の外に在れど、其の實は二者の間を出でぬ。故に知り難い。興は興象であり、興起である。彼の物に比喩して此の事を鋪陳し、彼の物に託興して此の辭を引起し、上下の辭相喚應する者である。故に興は興起である。然し彼の物に比託して此の辭を興起する故に、古來興を以て興象となし比喩と義を同じくす。參差荇菜。左右流之。窈窕淑女。寤寐求之。の上の二句は比で、下の二句は賦である。上二句の比を以て下二句の賦を喚起する是れ興である。故に興の名は

二者の外に在つて、其の實は二者の間を出でぬ。」（九經談卷之八）と。一は比の首章に在る者を興とすといひ、一は比賦を合せたる者を興とすといひ、共に興といふ別種のものあるに非ずとしてをる。物に比況することによつて、志意を興發せらるるものが興となるのである。三百篇は此の比興の法を以て事を敍することが多いから、詩を讀む者は此の點を十分に翫味すれば、作者の眞意も把握されるし、又自らの意志表示の指針ともなるのである。「詩を學ばざれば以て言ふなし。」（論語季氏）といひ、「詩は以て興すべし。」（同陽貨）といふは皆此の間の消息を傳へたものである。

六　詩の六德六語

上掲大師職の「教六詩。曰風。曰賦。曰比。曰興。曰雅。曰頌。以六德爲之本。」をば鄭玄は「所教詩、必有知仁聖義忠和之道。乃後可教以樂歌。」と解してをる。これは大司徒職の六德を以て解したので詩には適切でない。仁井田南陽・孫詒讓等が大司樂の「以樂德教國子中和祗庸孝友。」の六德を以て解したのが正しいと思ふ。詩樂不離の關係は上已に述べた通りであるから當然の事と信ずる。鄭注に「中。猶忠也。和。剛柔適也。祗。敬。庸。有常也。善父母曰孝。善兄弟曰友。」とある。中和は大司徒六德の下の忠和と同じく、孝友は大司徒六行の上の孝友と一致する。唯祗庸二德が周官の諸德に見えぬ所である。南陽は中和、祗庸、孝友は二德各一類をなす。中は不偏、和は適均である。人は天地の中を受けて生まれ、仁義の良心を固有するが、その受性が異なるので事に當り、盡く中に由つて利を致すことは出來ぬ。聖人爲に教を設け、過を抑へ不及を引き、偏を救ひ弊を矯めて、大中至和の德を成さしめるために、詩をば誦し歌ひ、絃し舞はしめ、優柔厭飫し涵養薫陶して溫良和平の氣を起さしめる。其の極功は中庸の「中和を致せば天地位し萬物育す」に至るのである。祗庸は終始敬に一にして安肆放縱せぬをいふ。中庸に「庸德を行ひ、庸言を謹む」とあるに同じ。康誥に文王の德を擧げて「庸を庸にし、祗を祗み、威を威る」といひ、大雅に文王の德を稱して「惟此の文王、小心翼翼たり。」といへるも同義である。此の文王の德は人人當務の尤も切なる者である。孝友の二者は人情の實に出で、慈愛惻怛の發する所で實に衆德の基本である。孝經に「孝は德の本なり、敎の繇つて生ずる所なり」といひ、論語に「本立つて道生ず、孝弟は其れ仁の本なるか」といひ、孟子に「堯舜の道は孝弟のみ」といひ、又「仁の實は親に事ふる是れなり。義の實は兄に從ふ是れなり、智の實は斯の二者を知つて去らざる是れなり、禮の實は斯の二者を節文する是れなり。樂の實は斯の二者を樂す」といつてをる。衆德百行は孝弟に根かぬものはない。六德分けて言へば、孝友は本、祗庸は常、中和は用であるが、

其の歸を要すれば仁である。溫柔敦厚と相發するに足る。

大司樂に又「以樂語教國子、興道諷誦言語。」とある。鄭玄は「興者以善物喩善事。道讀曰導。導者言古以剴今也。倍文曰諷、以聲節之曰誦。發端曰言、荅述曰語。」と解してをる。樂に被らしめたる者は皆詩なれば、樂語は卽ち詩語である。六語を教ふる所以は、言語應荅詩樂に比し、意旨を通じ鄙倍に遠ざからしむる所以である。興道と諷誦と言語と三類なることは六德に同じ。興は六義の興と同義である。論語孔安國の注に「興は譬を引き類を連ぬるなり」とある。道は導と通ずる。釋名に「導は陶也、己が意を陶演する也」といひ、廣雅に「導は語也」とある。剴は說文に「摩也」とあるから、鄭注の導の意は遠古の言語を道引して、今行ふ所の事に摩切することである。樂記に子夏が古樂を說き、君子是に於て古を道くといへるは道である。(興に就いては下の「詩と興觀」の項に詳說する。)南陽は「綿蠻黃鳥。止于丘隅。」に對し、孔子が「於止知其所止。可以人而不如鳥乎。」(大學)といひ、「迨天之未陰雨。徹彼桑土。綢繆牖戶。今此下民。或敢侮予。」に對し、孔子が「爲此詩者。其知道乎。能治其國家。誰敢侮之。」(孟子公孫丑上)といへるなどは、引譬連類もので卽ち興道であると說いてをる。諷誦竝に文を背にして「クチズサム」ことであるが、區別すれば諷は直言して吟詠せず、誦は背文のみでなく吟詠をなし、聲を以て之を節するのである。徐養原が「諷は小兒の背書の如く、聲回曲なし、誦は抑揚頓挫の致あり」と解したのは適切である。孫詒讓は荀子の「少不誦」の楊倞注に「諷謂就學諷詩書也」といひ、「文王世子」の「春誦」の註に「誦謂歌樂也。」とある歌樂は卽ち詩なりと斷じ、この諷誦は共に樂に配して詩を歌ふと解した。詩を賦して各志を言ふことは左傳などにも澤山見えてをることで、當時外交上の用語とせられた感がある。(下の「詩と外交」に詳說する)言と語とは區別すれば、言は唯發言するので念の入らぬもの、語は人と荅述し又題目を設けて問難するので念の入つたものである。論語に「食不語。寢不言。」(鄉黨)とある。寢時には發言せず、食時は發言しても語らず、念の入りたる荅述は食時には愼しむべきである。禮記に「三年之喪。言而不語。」(雜記)とあるにても明瞭ならん。人と對談し又は己の見を立つるに當り、詩を引いて之を證することが多い。左傳(昭公三年)に「宋穆公卒。殤公卽位。君子曰。宋宣公可謂知人矣。立穆公。其子饗之。命以義夫。商頌曰。殷受命咸宜。百祿是荷。其是之謂乎。」とある如きがそれである。

七　詩と興觀

詩は溫柔敦厚の性情より發したる感を他意なく如實に吐露し、其の表現法は微婉にして含蓄多

く、内は六德を具へて人倫の準的を示し、外は聲調諧和にして管絃に被し、歌樂舞蹈已む能はざらしめ、更に對話應答の模楷となり社交をして圓滿ならしめることは上述の如くである。是れにて詩の功用の一端は明かにされたが、更に精細に說明したものは論語の

子曰。小子何莫學夫詩。詩可以興。可以觀。可以羣。可以怨。邇之事父。遠之事君。多識於鳥獸艸木之名。陽貨

であらう。是れは詩を學ぶの益を說いたもので卽ち詩の功用である。孔子が弟子達に呼びかけ、お身等はなぜ夫の詩を學ばぬか早く學ぶがよい。詩を學べば興觀羣怨が完全に出來、忠孝の大倫も行はれ、其の上に博物學上の知識も得られるではないかと訓諭されたのである。

興とは上述の如く譬を引き類を連ねることである。卽ち左傳襄公十四年、晉が秦を伐ちし時、諸侯の師涇に及んで濟らず。叔向が叔孫穆子に會見したので、穆子は「匏有苦葉」を賦した。すると叔向は退下して舟を用意した。これは詩に「深則厲、淺則揭。」とあるによる。又昭公三年、子產が鄭伯を相けて楚に行つた。楚子之を享して「吉日」を賦した。享宴畢るや否や子產は田獵の準備をしたので、楚子は雲夢で獵をした。「吉日」は宣王が田獵をした詩である。此の如く正面から言はず、事物に興託して己の意思を傳へることを興といふ。觀とは詩には國家の大より一身一家の事に至るまで纖悉せざるはなく、世態人情、興亡盛衰何一つ具はらぬものなく、事の顯微、物の精粗、手に取る如く明かである。觀の義は見や視と異なり、事物の表裏源委、左右前後、凡ゆる角度から眺めて眞相を捉へることである。詩を玩味するに尤も忌むのは皮相の觀察である。併し穿鑿に過ぎても本意を失ふから注意を要する。荻生徂徠が興と觀とに就いて合說してをる「論語徵」が傾聽に値するから引用する。

大抵詩は性情をいひ、諷諫を主とし、類に觸れて賦し、從容以て發する。言典則に非ざれば旨微婉に在り、繁繁雜雜、零零碎碎、大小具在し左右原に逢ひ、其の義窮りなく大に他經の比でない。然し其の用は興と觀とに在るのみ。興は其の自ら取るに從ひ展轉已まず。觀は默して之を存し情態目に在る。凡そ諸の政治風俗、世運の升降、人物の情態、朝廷に在つて閭巷を識るべく、盛代に在つて衰世を識るべく、君子に在つて小人を識るべく、丈夫に在つて婦人を識るべく、平常に在つて變亂を識るべく、天下の事皆我に萃るは觀の功である。書は聖賢の大訓、禮樂は德の則であるが、苟も詩がその輔をなさぬと、何を以て能くこれを性情に體して周悉遺さぬことが出來ようか。興に於てこれを取るに及んでは、或は正或は反、或は旁或は側、或は全或は支、或は比或は類、典常を爲さず類に觸れて長じ、引いて之を伸し愈々出でて愈々新に、

譬へば繭の緒を抽くが如く、燧の薪に傳くに比し、我よりする者を取つて天下に施すべきで、これが興の功である。禮樂典誥は教法淪らず、若し詩がその輔をなさねば、何を以て事物に應酬し變化盡くるなきを得ようか。かくて詩の用は全く興觀の二者に在るのである。

説いて詳なるものと謂ふべきである。

八　詩と羣怨

羣とは孔安國は「羣居して相切磋するなり」と解してをる。焦循は詩の教は溫柔敦厚であるから、之を學べば輕薄嫉忌の習が消える。故に羣居して相切磋する事が出來ると敷衍した。左傳襄公二十七年、齊の慶封魯に來聘す。叔孫之と食す。封不敬なりしにより「相鼠」を賦したが覺らなかつた。これ「鼠をみるに皮あり、人にして儀なし、人にして儀なくば、死せずして何をか爲さん」とあるに因る。同二十八年、叔孫穆子が慶封と食事をした。封が氾祭して不恭なりしにより、穆子は樂師をして「茅鴟」を誦せしめたとある。「茅鴟」は逸詩であるから詞意は知るに由ないが、不敬を刺つた詩であらう。是れ等は相切磋するのである。切磋の本は互に和睦することにある。相互に和する心なくば切磋は思ひも寄らぬことである。されば羣は人人相和して團體生活が完全に出來ることである。下文の遍くしては父に事へ、遠くしては君に事ふるが家庭、國家なるに對していへば羣は社會的とも解せらる。勿論國家の一員として家庭の一員としても羣するのであるが、朋友を始め一般民衆と羣する事が寧ろ重い樣に思はる。これ和德を説いたものである。羣居して相厭ふことなきは詩中其の例が多い。小雅・大雅に於ける君臣相會して酒に醉ひ德に飽き、團欒交驩せる例は已に述べたが（四、溫柔敦厚の條）朋友を燕したるは「伐木」あり、朋友の交を敍したるは「南山有臺」「蓼蕭」「菁菁者莪」などがある。大雅の民勞には「王欲玉汝。是用大諫。」といひ、「板」には「猶之未遠。是用大諫。」とあるから共に同列相切磋せる詩と思はる。此等は朝廷に於ける君臣、同列、朋友等が輯睦し、又相規したる例なるが、農民間の羣せる例は更に掬すべきものがある。豳風「七月」には「朋酒斯饗。曰殺羔羊。躋彼公堂。稱彼兕觥。萬壽無疆。」とある。小雅の「甫田」「大田」が上下相輯睦せる狀は已に述べたが、「楚茨」「信南山」にも同趣の事が見えてをる。周頌の「載芟」「良耜」などは妻子眷屬奴婢は勿論、近鄰の手傳人に至るまで協力して田に力むる樣を敍してをる。かかる詩を諷詠すれば自ら羣せざるを得ぬ樣になる。試みに「載芟」を擧げよう。

載芟載柞。其耕澤澤。千耦其耘。徂隰徂畛。侯主侯伯。侯亞侯旅。侯彊侯以。有嗿

其饁。思媚其婦。有依其士。有略其耜。（假載南畝。）播厥百穀。實函斯活。驛驛其達。有厭其傑。厭厭其苗。緜緜其麃。載穫濟濟。有實其積。萬億及秭。爲酒爲醴。烝畀祖妣。以洽百禮。有飶其香。邦家之光。有椒其馨。胡考之寧。匪且有且。匪今斯今。振古如茲。

見馴れぬ字を多く聯ねてをるが、全體として農民が羣居して其の業に服し居る狀が宛然觀るが如くである。

羣は和より生ずるが、和を破るものは實に讒である。夫故詩人は讒譖をば尤も惡んでをる。小雅の「巧言」「何人斯」「巷伯」がそれである。「巧言」は六章より成るが、首章は大夫が讒を傷み控告する所なく、之を天に訴へたるもので「悠悠昊天。曰父母且。無罪無辜。亂如此憮。昊天已威。予愼無罪。昊天泰憮。予愼無辜。」といひ、次章は王に警告して「亂之初生。僭始既涵。亂之又生。君子信讒。君子如怒。亂庶遄沮。君子如祉。亂庶遄已。」といつてをる。第五章は巧言は口より出すべからざるに、厚顏の徒は恥ぢずとて之を惡み、「荏染柔木。君子樹之。往來行言。心焉數之。蛇蛇碩言。出自口矣。巧言如簧。顏之厚矣。」と斷じてをる。「何人斯」は八章より成るが、舊說に暴公が鄕士となり蘇公を譖したので、蘇公が彼と絕交するために作つたものとしてをる。併し暴公を斥言せず、「彼何人斯。其心孔艱。胡逝我梁。不入我門。伊誰云從。維暴之云。」の如く其の從行者を指していひ、「不入我門」にて譖すること明かなるを言ひ、第二章は「二人從行。誰爲此禍。胡逝我梁。不入唁我。始者不如今云。不我可。」と詠じて、始は今日の如く我を不可とせざりしにと怨み、第三章には「彼何人斯。胡逝我陳。我聞其聲。不見其身。不愧于人。不畏于天。」と讒人が天人を畏愧せず、其の蹤跡を詭祕にして讒口を逞うすることを極言し、卒章に「爲鬼爲蜮。則不可得。有靦面目。視人罔極。作此好歌。以極反側。」と反側の心を究極してをる。「巷伯」は讒に遭うて宮刑され、巷伯（宦官の長）となつた者が作つたとされてをる。

萋兮斐兮。成是貝錦。彼譖人者。亦已大甚。　哆兮侈兮。成是南箕。彼譖人者。誰適與謀。

緝緝翩翩。謀欲譖人。愼爾言也。謂爾不信。　捷捷幡幡。謀欲譖言。豈不爾受。既其女遷。

驕人好好。勞人草草。蒼天蒼天。視彼驕人。矜此勞人。　彼譖人者。誰適與謀。取彼譖人。投畀豺虎。豺虎不食。投畀有北。有北不受。投畀有昊。　楊園之道。猗于畝丘。寺人孟子。作爲此詩。凡百君子。敬而聽之。

譖人を取つて豺虎に投與し、豺虎も喰はずば極北の酷寒不毛の地に棄てん。若し受けずば昊天に投與して其の罪を制せしめんと、讒譖の人の疾惡すべきを極言してをる。

人間一生の中會心の事は數へる程もない。それは人には理想があり、理想は容易に實現せらる

べきものではなく、理想が實現され目的が到達せられたる時始めて會心出來るからである。されば貴賤貧富、老幼男女、或は物質的に或は精神的に、多少の不滿を抱かぬ者はない。治世には其の所を得ぬ者は比較的少いが。亂世になると貧者は食を得られず、富者は財を保たれず、一家離散し萬民生を聊んぜざるに至る。かかる際にも天を怨まず人を咎めず、泰然として居られるのは聖賢のみである。常人は詩序に「亂世之音、怨以怒。」とある如く怨刺の情起り、遂には憤怒するに至る。併し三百篇中の怨は、其の事情に應じて强弱の差こそあれ、過激に亙らず怨の正を得たものである。史記に「小雅怨誹而不亂」（屈原賈生列傳）とある如く、變風變雅には怨詩が多いが皆亂には至らぬ。其の怨の多くは天に訴へ父母を呼んでをる。史記に「夫天者人之始也、父母者人之本也。人窮則反本。故勞苦倦極。未嘗不呼天也。疾痛慘怛、未嘗不呼父母也。」（同上）とあるは眞實の言である。「天之抗我。如不我克。」（正月）「浩浩昊天。不駿其德。」（雨無正）「旻天疾威。敷于下土。」（小旻）「悠悠昊天。曰父母且。無罪無辜。亂如此憮。」（巧言）「蒼天蒼天。視彼驕人。矜此勞人。」（巷伯）「明明上天。照臨下土。」（小明）「倬彼昊天。寧不我矜。」（桑柔）「天降喪亂。饑饉薦臻。」（雲漢）「瞻卬昊天。則不我惠。」（瞻卬）「旻天疾威。天篤降喪。」（召旻）「昊天不傭。降此鞠訩。昊天不惠。降此大戾。」（節南山）等は天に訴へた者であり、「父兮母兮。畜我不卒。」（月）「母也天只。不諒人只。」（柏舟）「父母生我。胡俾我瘉。」（正月）等は父母を呼び訴へた者である。「柏舟」は衞の世子共伯の妻共姜が、其の夫の早世せし時義を守れるに、其の父母之を奪ひ他に嫁せしめんとしたので、其の志を述べて自ら誓つた詩である。

汎彼柏舟。在彼中河。髧彼兩髦。實維我儀。之死矢靡他。母也天只。不諒人只。

これその首章である。第二章は同意の句を反複詠歎してをる。母の我に於けるは天にも比すべきなるに、我が心を諒察して吳れぬと怨を述べてをる。

衞國に七子ある母にして、其の室に安んぜず再婚せんとした者がある。其の子等は母を怨まず七子あつて而も母を安んずる能はざるを以て、自分等を責める詩を作つたのが有名なる「凱風」である。

凱風自南。吹彼棘心。棘心夭夭。母氏劬勞。　凱風自南。吹彼棘薪。母氏聖善。我無令人。

爰有寒泉。在浚之下。有子七人。母氏勞苦。　睍睆黃鳥。載好其音。有子七人。莫慰母心。

首章は凱風を以て母に比し、棘心を以て七子の幼時に況し、凱風たる母氏生育長養の苦勞を敍して自責の端を開き、第二章は棘薪を以て七子の壯大となれるも美材ならざるに況し、母氏は聖善なるに七子は善人なしと歎じて深く自己を責め、第三四章は寒泉は浚の地を潤し、黃鳥は人を悅ばすに、七子は母に事へてその心を慰むる能はず、母をして勞苦せしむと自責の念が愈々篤い。

その婉詞幾諫して親の惡を言はざる所が孝子の情と謂ふべく、怨の正を得たものである。

周の幽王が申國より后を迎へ太子宜臼を生んだが、後に褒姒を得て之に惑ひ、子伯服を生むや其の讒を信じ、申后を黜けて宜臼を逐うた。乃で宜臼が詩を作つて自ら怨んだのだとせられてをるのが有名な「小弁」である。

弁彼鸒斯。歸飛提提。民莫不穀。我獨于罹。何辜于天。我罪伊何。心之憂矣。云如之何。　踧踧周道。鞫爲茂草。我心憂傷。惄焉如擣。假寐永歎。維憂用老。心之憂矣。疢如疾首。　維桑與梓。必恭敬止。靡瞻匪父。靡依匪母。不屬于毛。不離于裏。天之生我。我辰安在。　菀彼柳斯。鳴蜩嘒々。有漼者淵。萑葦淠々。譬彼舟流。不知所屆。心之憂矣。不遑假寐。鹿斯之奔。維足伎伎。雉之朝雊。尚求其雌。譬彼壞木。疾用無枝。心之憂矣。寧莫之知。　相彼投兎。尚或先之。行有死人。尚有墐之。君子秉心。維其忍之。心之憂矣。涕既隕之。　君子信讒。如或醻之。君子不惠。不舒究之。伐木掎矣。析薪杝矣。舍彼有罪。予之佗矣。　莫高匪山。莫浚匪泉。君子無易由言。耳屬于垣。無逝我梁。無發我笱。我躬不閱。遑恤我後。

彼の鴉烏ですら羣飛安閒塒に歸る。何人を見ても處を得皆善からぬ者なきに、唯我のみ憂へてをる。鴉烏にも衆人にも如かぬ我は如何なる罪を天に得てをるのか。心配でたまらぬ、如何してよいか。これが首章の大意である。舜が田に往き旻天に父母に號泣し、父母の我を愛せざる、我に於て何ぞやと、怨慕したると同義である。さて平易坦直なる大道も窮まつて茂れる草に埋もれて仕舞つた。憂傷の念、物を以て打ちのめされる如くである。精神消索して假寐の中にもなほ永歎し、年若きに一時に白髮になる。心配で頭痛に堪へぬ。（第二章）桑と梓とは父母の植ゑたるが故に尚ほ必ず恭敬を加へる。瞻仰するとして父に非ざるなく、親依するとして母に非ざるなし。然るに斯の父にして我を愛し給はず。我が體は父母の毛に連屬せざらんや、父母の心腹に著かざらんや。父母の分身にして斯くもつれなくされる。嗚呼天の我を生める、其の時期が善からざりしか。何ぞかかる運命に置かるるぞ、（第三章）咎を歸する所なくして天に求むる。所謂人窮する時は必ず天を呼ぶ者である。鬱然たる柳あれば蟬その蔭に鳴き、深き淵あれば萑葦多く周邊に茂る。然るに我のみは棄逐せられて、捨小舟の水中に流れて其の至る所を知らざるが如く、心配の極今は假寐する暇もない。（第四章）鹿の走るを見るに、その足伎伎として安舒である。雉が朝鳴くや尚ほその雌を求む。禽獸でも此の如きに、我のみは棄逐せられて、傷壞の木が憔悴して枝なきが如くである。此の心の憂をなどて誰も知らざる、噫。（第五章）彼の逐はれて人に投じ來る兎あれば、何人でも其の窮を哀んで之を脫せしめてやる。道に死人あれば、無關係の者でも其の暴露を哀んで埋藏してやる。

人には皆この人に忍びざる心があるものであるが、今父君には讒を信ぜられて、我を視給ふこと投兎死人にも及ばぬ。その心の持ち方が何と忍ではないか。心配で涙がはふり落ちる。第六章　忍は惻隱の心の反、卽ち溫柔敦厚の裏で、人として尤も唾棄すべきものである。これを以て父君に哀訴する、其の窮情の切なるを見るべきである。父王は讒言を信ぜらるること、杯に注ぎたる酒を直ちに飲むが如く直ぐに信ぜられて、惠愛の情を以て徐ろに究察せられず。若し緩舒に究察なされば、讒人の情僞を明瞭に感得せられんものを。木を伐る者は物を以て巔に倚せ、薪を析く者は其の理に隨ひ、妄りに挫折せぬ如く、事物は皆理に順ふべきに、今は然らず、彼の有罪の讒人を捨てて其の罪をば我に加へてをる、理不盡の至である。第七章　山は如何に高くとも其の巔を極められん。泉は如何に深くとも其の底に徹するを得ん。されば父王には口を慎まれ、輕易に發言なさるな。壁に耳ありと申す諺もある。左右の人王言を聞くや、その意を迎合して讒誣中傷を逞しうし、父子の間を裂くに至るのである。斯く申すも今は詮なきことにて、褒姒は后にすわり、伯服は太子となつた。さて二人に警告せん、我が梁に往くな、我が筍を發くな。我が處に居り、我が事を行ふと、我等母子の如くならざるを得ぬぞ。吳吳も注意せよ。併し自ら思へば今は我が身すら容れられざる境遇なるに、何ぞ我が去る後などを心配する暇あらうぞといふのである。最後の四句は邶風の「谷風」にも見えてをり、新婚を樂んで糟糠の妻を棄てたる輕薄なる夫に對して、棄婦が述べたる詞で太子母子と境遇が酷似してをる。當時慣用の句と思はる。第八章　以上閔し來るに怨慕の情が隨分高潮してをる。自ら責むるよりは寧ろ父王に訴へて其の反省感悟を要望してをる。乃で此の詩が問題となれるは周知の如くである。孟子に高子が「小弁」は小人の詩である、何故とならば親を怨んでをるではないかと申したのに對し、孟子は之を固陋なりとして次の如く辨じた。此に人ありとせん、越國の人が弓を引いて他人を射んとする者あらば、其の人談笑しつつ越人に其の不可なるを言ひて阻止せんのみ。何となれば越人は疏遠にして我と沒交渉なる故、之を阻止すること迫切ならぬのである。然るに若し其の兄が弓を引き人を射んとせば、涕泣を垂れ其の不可を極言して之を阻止せん。是れ兄は我と休戚を同じうするを以て、親愛して之を言ふこと迫切である。「小弁」の詩は父子の大變にして國家の衰亡に關する故に、その詩詞哀痛迫切である。それは父王の心を感悟させたいからで、怨むのは親愛すればこそである。親を親むは仁ではないかと申した。然らば「凱風」は何故に怨まぬかと反問した。孟子は之に對して「凱風」は親の過小なる者である。「小弁」は親の過大なる者である。親の過大なるに怨まぬは愈疏遠にするものである。親の過小なるに怨むは水を石に激觸さす樣なもので、愼しまねばならぬことである。

「小弁」の際に怨怒せざるは親を疏遠にするもので不孝であり、「凱風」の際に怨怒するは激觸を敢へてするもので亦不孝であると申した。要するに詩は其の場合に應じたる感情を敍する筈のもので、二詩共に緩急宜しきを得、溫柔敦厚の其れといふことが出來る。以上は家庭内に於ける怨詩であるが、國家に對してのものも隨分ある。

小雅の「北山」は大夫が行役して作つた詩であるが、爲政者の不公平を怨んでをる。

陟彼北山。言采其杞。偕偕士子。朝夕從事。王事靡盬。憂我父母。　溥天之下。莫非王土。率土之濱。莫非王臣。大夫不均。我從事獨賢。　四牡彭彭。王事傍傍。嘉我未老。鮮我方將。旅力方剛。經營四方。　或燕燕居息。或盡瘁事國。或息偃在牀。或不已于行。或不知叫號。或慘慘劬勞。或栖遲偃仰。或王事鞅掌。　或湛樂飲酒。或慘慘畏咎。或出入風議。或靡事不爲。

自分の勞苦を訴へずして「憂我父母」といひ、溥天率土、王土王臣に非ざるなきに、王は均平ならずして我のみ獨り行役に勞すといふべきを。「大夫不均。我從事獨賢。」と申してをる。朱熹が「詩人の忠厚」と評したのは當つてをると思ふ。第三章は我未だ老いず、元氣旺盛にして膂力經營に堪ふるを以て、王之を賢として任用するならんといひ、第四章以下の三章は大夫使役の不公平なる事實を列記するに止まり、それに對して何等不平不滿の語を陳ねてはをらぬ。「小明」も亦行役の勞を敍したる怨詩である。五章より成るが首章に「明明上天。照臨下土。我征徂西。至于艽野。二月初吉。載離寒暑。心之憂矣。其毒大苦。念彼共人。涕零如雨。豈不懷歸。畏此罪罟。」と敍し、二月朔日西に于役し、歲暮に至つても歸るを得ざるを以て、天を呼んで之に訴へ、同僚の安處せる者を念ひ身の勞苦を痛むのである。かかる勞役も勞役と思はず、國事に盡瘁することが臣下としての本分であるから、その點より見れば此の詩も前詩と同じく議すべき者があるが、詩人は感じたることを餘念なく述べるのであるから、かく怨めしく思ふ折もあり、それを率直に敍したのである。第三章に「昔我往矣。日月方奧。曷云其還。政事愈蹙。歲聿云莫。采蕭穫菽。心之憂矣。自詒伊戚。念彼共人。興言出宿。豈不懷歸。畏此反覆。」といひ、かかる辛勞も自ら招けることにて誰を怨みん由もなしと諦め、百尺竿頭更に歩を進めて、「嗟爾君子。無恒安處。靖共爾位。正直是與。神之聽之。式穀以女。　嗟爾君子。無恒安息。靖共爾位。好是正直。神之聽之。介爾景福。」と僚友に呼びかけ、各自安處せず其の職場を守り、國事に勵精して穀祿を得よと戒告した。邶風の「北門」は衞の賢臣が亂世に處り、暗君に事へて志を得ざる怨を述べたものである。

出自北門。憂心殷殷。終窶且貧。莫知我艱。已焉哉。天實爲之。謂之何哉。　王事適我。政事一埤益我。我入自外。室人交徧讁我。已焉哉。天實爲之。謂之何哉。

三章より成るが、末章は第二章と同意なる故略した。これも怨を持ち行く處なく天に歸してをる。天は如何ともすべからざるものである。君王を怨恨せずして天に歸する所忠臣溫敦の情を見るに足る。

「小弁」の詩も幽王を改悟せしむるに至らず、太子宜臼は申國に奔つたので申侯怒り、犬戎と共に宗周を攻め幽王を弑した。晉・鄭の二國宜臼を迎へ立て東都の王城に居る。是に於て西周亡び東周興つたが王室微弱、小諸侯と擇ぶ所なき有樣となつた。其の後大夫行役して宗周に至り、故の宗廟宮室の跡が皆鋤返されて禾黍を生ずるを見て、彷徨去るに忍びず詠じたのが「黍離」である。三章より成るが首章は

彼黍離離。彼稷之苗。行邁靡靡。中心搖搖。知我者。謂我心憂。不知我者。謂我何求。悠悠蒼天。此何人哉。

とある。第二章は苗を穗に、搖搖を如醉に換へ、第三章は苗を實に、搖搖を如噎に換へただけでその他は全部同文である。反覆詠歎、具さに低回趦趄去るに忍びざるの狀を見る。而も周室の顚覆を傷み、その責任者を追怨すれど、明白に言はず、「悠悠蒼天。此何人哉。」と天に呼ぶ所、溫敦の情、婉曲の詞、眞に一唱三歎の妙がある。殷の箕子の作と稱せられる「麥秀漸漸兮。禾黍油油。彼狡僮兮。不與我好兮。」（史記宋微子世家）の歌は恐らく後人の假託で黍離を學んだものでもあらうが、其の露直膚淺、啻に天壤の懸隔のみではない。

九　詩と孝悌

三百篇を體得すれば手近の處では父に事へることが完全に出來るといふ。玆に父といふは母を兼ねたる意である。父母によく事へるには、兄弟に對して悌友でなくてはならぬ。又妻を娶れば夫婦相和し、協力して兩親に孝養を盡さねばならぬ。されば夫婦の別も孝道に缺くべからざることである。かく考へ到れば「事父」とは家庭道德の全部を包含したものと解しても差支はなからう。さて孝に就いては詩中隨處に見えてをるが、その代表的のものを擧げると「陟岵」「鴇羽」「蓼莪」の三篇を推さねばならぬ。「陟岵」は孝子役に行き其の親を忘れず、山に登つて其の父母兄の在る所を望み、其の父母兄が己を念ふ言を想像して述べた詩である。

陟彼岵兮。瞻望父兮。父曰嗟予子。行役夙夜無已。上慎旃哉。猶來無止。陟彼屺兮。瞻望母兮。母曰嗟予季。行役夙夜無寐。上慎旃哉。猶來無棄。陟彼岡兮。瞻望兄兮。兄曰嗟予弟。行役夙夜必偕。上慎旃哉。猶來無死。

彼の裸山に登つて父の居らるる方を瞻望して懐しみ思ふ。父は今頃多分かく言うて居られるであらう。ああ我が子は役に行き、夙夜勤勞して止息するを得ざらん、誠に御苦勞千萬である。願はくは注意に注意を重ね、無事に歸り來るようにせよと。第二章は母、第三章は兄に就いて同樣に思ひ居るのである。是れ父母兄が己を念ふ言を設けて言へど、實は己が父母兄を念ふ意を寫したものである。是れ父子兄弟孝慈友愛の情の交流する所以である。

「鴇羽」は征役に從つて其の父母を養ふことを得ざる者が作つた詩である。

肅肅鴇羽。集于苞栩。王事靡盬。不能蓺稷黍。父母何怙。悠悠蒼天。曷其有所。
肅肅鴇翼。集于苞棘。王事靡盬。不能蓺黍稷。父母何食。悠悠蒼天。曷其有極。
肅肅鴇行。集于苞桑。王事靡盬。不能蓺稻粱。父母何嘗。悠悠蒼天。曷其有常。

鴇は雁に似て更に大、樹に止らぬ鳥なるに、今羽音高く飛び叢生せる柞櫟の上に止る。是れ恰も民は勞苦を好まざるに、今久しく征役に從ふが如くである。朝廷の事は緩にしてはおけぬ。それ故田を耕し稷黍を植うることが出來ぬ。父母は何を賴みとしてをらう。悠悠たる蒼天よ、何時になつたら我をして其の所を得しめて下さいますか。矢張り天に訴へてをる。第二三章も同意を反覆詠歎してをる。

「蓼莪」は人民勞苦し、孝子養を終ふる能はずして作つた詩である。

蓼蓼者莪。匪莪伊蒿。哀哀父母。生我劬勞。　蓼蓼者莪。匪莪伊蔚。哀哀父母。生我勞瘁。　缾之罄矣。維罍之恥。鮮民之生。不如死之久矣。無父何怙。無母何恃。出則銜恤。入則靡至。
父兮生我。母兮鞠我。拊我畜我。長我育我。顧我復我。出入腹我。欲報之德。昊天罔極。
南山烈烈。飄風發發。民莫不穀。我獨何害。　南山律律。飄風弗弗。民莫不穀。我獨不卒。

生育長大せる者は美榮なりと思ひしに、何ぞ圖らん蒿であつた。其の如く父母我を生み長養して美材となし、賴つて以て其の身を託せんとせられしに、其の養を得ずして逝かれた。噫。父母生育の勞苦を思ふと哀傷の情に堪へぬ。(首章)第二章も同意を反覆詠歎す。酒を盛るに小缾は大罍に資り、大罍は小缾に資り、相倚ること父母の子と相依つて命をなすが如くである。缾の盡くるは罍の恥である如く、父母が其の所を得ざるは子の責任である。されば獨窮の民は生けるも死するに如かぬ。父なければ怙む所なく、母なければ恃む所なし。是を以て出でては中心憂を抱き、入つては歸する所なき有樣である。(第三章)父は我を生み母は我を鞠ひ、我を撫で我を畜ひ、我を生長せしめ我を養育し、我を眷顧し我を反覆し、出入に我を懷いて吳れた。その恩德に報いんとするも、昊天の窮極なきが如く報ずる術を知らぬ。(第四章)南山高大なれば飄風發發と迅疾に之に當

る。人人は皆善からざる者なきに、我のみは何故かかる害に遭へるぞや。而して結局父母の養を終へることが出來なかつた。（第五、六章）と父母歿後其の孝養の足らざりしを傷むの念痛切である。朱善が「陟岵」「鴇羽」は父母を生前に思念し、「蓼莪」の詩は父母を歿後に感傷したものである。父母俱に存する者は未だ此の詩の悲を知るまいが、若し父母に別れたる人にして、此の詩を三復して涕を流さぬ者は人の子でないと申したのは尤である。魏の司馬昭が監軍となり吳と戰つて敗れた時、昭は今日の戰敗は誰が其の咎に任ずるかと尋ねたところ司馬たる王儀は元帥の責任だと申したので、昭は怒つて之を斬つた。其の子王裒は父の非命を痛み隱居して敎授し、三徵七辟されたが皆拒絶し、父の墓側に廬し墓前に拜跪悲號し、詩を讀み此に至る毎に三復流涕せぬことはなかつた。弟子は之に感じ此の篇を讀まなかつたといふ。詩の感化も亦偉大なるものである。

終を愼み遠を追ひ、死に事ふること生に事ふるが如きは孝子の情である。この心は單に父母のみに止まらず、祖先に遡るのである。支那は農業立國である。農業は祖先以來の田宅を守り、其の志業を繼述せねばならぬ。それには家族が集合協力して事に當らねばならぬ。かくて農業立國と家族本位とは不可分の關係を生ずる。而して父祖の業を恢弘して之を子孫に傳へることが孝の第一義となる。この連續的永遠性が詩中に漲つてをる。「子子孫孫。勿替引之。」（楚茨）「是剝是菹。獻之皇祖。曾孫壽考。受天之祜。」（信南山）「自古有年。」（甫田）「有飶其香。邦家之光。有椒其香。胡考之寧。匪且有且。匪今斯今。振古如茲。」（載芟）「以似以續。續古之人。」（良耜）などはその祖先に遡る方であり、「文王孫子。本支百世。」（文王）「聲聞于士女。從以孫子。」（既醉）「君子有穀。詒孫子。」（假樂）「壽考且寧。以保我後世。」（殷武）「詒厥孫謀。以燕翼子。」（文王有聲）等は後世子孫に垂れるものである。其の祖德を感謝するものには、「無念爾祖。聿修厥德。」（文王）「永言孝思。孝思維則。」「永言孝思。昭哉嗣服。」（下武）「威儀孔時。君子有孝子。孝子不匱。永錫爾類。」（既醉）「允文允武。昭假烈祖。靡有不孝。自求伊祜。」（泮水）等がある。周頌の「閔予小子」と「訪落」とは全篇此の主旨を陳べてをる。

閔予小子。遭家不造。嬛々在疚。於乎皇考。永世克孝。念茲皇祖。陟降庭止　維予小子。夙夜敬止。於乎皇王。繼序思不忘。

訪予落止。率時昭考。於乎悠哉。朕未有艾。將予就之。繼猶判渙。維予小子。未堪家多難。紹庭上下。陟降厥家。休矣皇考。以保明其身。

父母に孝養を盡し祖先に敬事するには、一家協力和合せねばならぬ。それには「刑于寡妻。至于兄弟。以御于家邦。」（思齊）とある如く、先づ其の儀法をば閨門に施して兄弟に及ぼすべきである。夫婦相和して其の化遠近に及んだ狀の見られるのは周南召南二十五篇である。試みに周南十一篇を

概説すると、首篇の「關雎」は文王の妃大姒を得たことを喜んで作つたと謂はれてをる。「關關雎鳩。在河之洲。窈窕淑女。君子好逑。」と、雌雄呼び交はし而も禮あつて淫ならざる雎鳩に興して、文王と大姒との好配偶なるを頌し、之を得るまでに左右が如何に心を碎いたかを抒べて、「窈窕淑女。寤寐求之。求之不得。寤寐思服。悠哉悠哉。輾轉反則。」といつてをる。如何にも情の切なるものがある。既に之を得れば、「窈窕淑女。琴瑟友之。」「窈窕淑女。鐘鼓樂之。」と敍してをる。所謂「關雎樂而不淫。哀而不傷。」(論語八佾)ものである。「葛覃」は大姒が親ら葛を刈り取り、之を煮て絺綌の衣を作り、親ら勞役に服し粗衣を纏うて厭はず、又生家に歸つて父母を寧んじたきことを、女師をして夫君に請はしめ、親ら衣服を洗濯したことなどを敍してをる。朱熹が「可以見其已貴而能勤、已富而能儉、已長而敬不弛於師傅、已嫁而孝不衰於父母。是皆德之厚、而人所難也。」と贊したのは肯綮に中つてをる。「卷耳」は文王久しく不在なりし時、大姒思念の餘に賦した詩で、「采采卷耳。不盈頃筐。嗟我懷人。寘彼周行。」と說き起してをる。迫切の情が躍如としてをる。「樛木」は大姒妬忌の心なく恩惠下に逮んだので、衆妾其の德を樂み、南山に下曲せる木あれば葛藟之に纏ひつく如く、惠福を下に及ぼせる后妃には、衆妾攀附するを興し、此の如き樂しめる內君は福祿之を安んぜんと祝禱した詩である。支那は一夫多妻の習慣あり、妻妾同一邸內に居住するので、嫉妬反目する時は家が治まらぬ。故に女子最大の美德は妬忌せぬことである。その妬忌の心なきことが衆妾を感孚させたのが「樛木」である。其の結果文王の子孫衆多なることを、一生九十九子と稱する螽斯の羣處和集せるに比したのが「螽斯」である。文王の化家より國に及び、男女正を得、婚姻時を以てしたので、詩人會々見る所の桃花に興して、新婦の容貌才德必ず一家一門の人人と調和すべしと贊歎したのが「桃夭」で、「桃之夭夭。灼灼其華。之子于歸。宜其室家。」とある。かくて風化行はれ美俗成り、賢才衆多にして兎を網する野人までも君侯の干城腹心であると稱歎したのが「兎罝」である。風俗醇美にして室家和平、婦人事なく相與に芣苢を採り樂む狀を敍したのが「芣苢」である。漢水長江の邊は淫風盛なりしが、文王の化漸く南方に及び、江漢の大堤に出遊する女子、端莊靜一にて前日の風を一變し、淫蕩の男子も近づき難きを以て、喬木を以て興を起し、江漢を以て比をなし「南有喬木。不可休息。漢有游女。不可求思。漢之廣矣。不可泳思。江之永矣。不可方思。」と謠ひ、後半の四句を二・三章に反復詠歎したのが「漢廣」である。文王の化更に東して汝水の流域に及び、汝傍の國の婦人、其の夫の行役して歸れるを喜び、不在中思望の情甚だしかつたことを追賦し、殷紂の政刑酷烈にて、征役頻繁なれど、父母にも比すべき文王を望むこと甚だ近ければ、其の勞を忘れて王事に鞅掌せられたしと、

其の君子を慰勞し勤勉したのが「汝墳」である。文王も后妃も仁厚にして德が身に修まり、子孫宗族皆之に化したので、詩人が仁獸なる麟を以て之に比したのが「麟之趾」である。序に「關雎の應」といへるは當つてをる。朱熹は周南を總括して、「按此篇、首五詩皆言后妃之德。關雎舉其全體而言也。葛覃・卷耳、言其志行之在己。樛木・螽斯、美其德惠之及人。皆指其一事而言也。其詞雖主於后妃、然其實則皆所以著明文王身修家齊之效也。至於桃夭・兎罝・芣苢、則家齊而國治之效。漢廣・汝墳、則以南國之詩附焉。而見天下已有可平之漸矣、若麟之趾、則又王者之瑞、有非人力所致而自至者。故復以是終焉。」と斷じたのは確當の言と思ふ。召南十四篇は諸侯の夫人、大夫の妻の德を敍してをるが、皆文王后妃の德化である。二南は所謂正風で家を正す道が十分に說かれてをる。されば孔子も其の子伯魚に「人而不爲周南召南、其猶正牆面而立也與。」（論語陽貨）と諭されてをる。

夫婦相和して家道興るは上述の如くであるが、兄弟互に提携勤勉することが必要である。「沔水」には「嗟我兄弟。邦人諸友。莫肯念亂。誰無父母。」とある。父母に憂の及ばんことを恐れて、亂を念ふことなからんことを警戒したのである。「斯干」は家屋の落成を祝した詩であるが、是の室に居る者は「兄及弟矣。式相好矣。無相猶矣。」と謳つてをる。「小宛」は大夫亂世に遭ひ兄弟相戒めて禍を免れんとせる詩であるが、「我心憂傷。念昔先人。明發不寐。有懷二人。」「各敬爾威儀。天命不又。」「題彼脊令。載飛載鳴。我日斯邁。而月斯征。夙興夜寐。無忝爾所生。」などの句がある。「二人」も「所生」も共に父母を指すので、互に父母を懷ひ之を辱めざらんことを戒め合うたものである。又「常棣」は兄弟を燕する樂歌であるが、八章每章四句より成る。

常棣之華。鄂不韡韡。凡今之人。莫如兄弟。　死喪之威。兄弟孔懷。原隰裒矣。兄弟求矣。　脊令在原。兄弟急難　每有良朋。況也永歎。　兄弟鬩于牆。外禦其務。每有良朋。烝也無戎。　喪亂既平。既安且寧。雖有兄弟。不如友生。　儐爾籩豆。飲酒之飫。兄弟既具。和樂且孺。　妻子好合。如鼓瑟琴。兄弟既翕。和樂且湛。　宜爾室家。樂爾妻帑。是究是圖。亶其然乎。

首章は至親の兄弟に及ぶなきを說き、第二章は死喪の禍は他人の畏恐する所なるに、兄弟は甚だしく相おもひ、尸を積んで原野に聚むるにも、兄弟のみは相求むといひ、第三章は急難ある時は、良朋にてもただ永歎するのみなるに、兄弟は互に助け合ふと斷じ、第四章は、日頃は互にいがみ合うても、外侮に對しては十分に防禦するをいひ、第五章は艱難の時は相救へど安寧の後は兄弟を視ること友生にも及ばぬが、不合理の甚だしきものなるをいひ、其の弊に陷らぬよう戒告し、第六章は籩豆を陳ねて醉飽しても兄弟具らぬ時は、與に樂を享け難きを說き、第七章は妻子好く

和合しても、兄弟が合はねば其の樂を永續することは出來ぬと喝破し、卒章は室家に宜しきも、妻子を樂むも、究極する所は兄弟の和樂が出來ての上のことであると斷じたのである。「頍弁」は兄弟親戚を燕する詩であるがその首章に

有頍者弁。實維伊何。爾酒既旨。爾殽既嘉。豈伊異人。兄弟匪他。蔦與女蘿。施于松柏。未見君子。憂心奕奕。既見君子。庶幾說懌。

とある。立派な冠を著けてをるのは誰か。汝の酒殽が既に嘉美なるからは、他人にあらずして兄弟である。蔦蘿が松柏に施へる樣に、兄弟親戚は纏綿依附して互に力になり合ふ者であるから、相見ぬ内は憂に堪へ兼ねたが、既に相見たからは喜び合はうではないかといふのである。第二・三章も同意のことを反復詠歎してをる。前詩と共に兄弟の和樂せる樣が能く描かれてある。此の如く兄弟は提携して相依るべきであるから、兄弟なき人は誠に心寂しきものである。唐風「杕杜」は兄弟なき者が自ら其の孤獨を傷んで作つた詩である。二章より成るが同意を反復するので首章を擧げよう。

有杕之杜。其葉湑々。獨行踽踽。豈無他人。不如我同父。嗟行之人。胡不比焉。人無兄弟。胡不佽焉。

特立せる赤棠は葉が盛に茂つてをる。我は孤影蕭然として獨り歩行してをる。他人の同行すべき者がない譯ではないが、我が兄弟に及ばぬから共に行かぬ。嗚呼道行く人よ、何ぞ我が獨行を閔んで親まれざるか。我は兄弟なく心寂しきに、何とて我を助けざるかといふのである。洵に寂寞の情に堪へぬ。

上述する所は父子祖孫夫婦兄弟の道卽ち家庭道德である。之を槩括して「邇之事父」と申されたのである。詩經三百篇を玩味すれば、家庭の一員として完全に道を行ふことが出來ることは前掲の詩だけに觀ても首肯されることと思はる。

一〇　詩と忠君

詩は忠厚の至（清の乾隆帝の語）である。殊に君上に對して情の濃かなる者がある。上掲の「我朱孔陽。爲公子裳。」「取彼狐狸。爲公子裘。」「言私其豵。獻豜于公。」「雨我公田。遂及我私。」などの之を證してをる。眇たる秦君が始めて車馬に乘り、寺人の官を設くるや、國人は喜んで「車鄰」を賦し、其の獵を催すや「駟驖」を賦し、更に其の容貌衣服の美を稱へて「君子至止。錦衣狐裘。顏如渥丹。其君也哉。」「君子至止。黻衣繡裳。佩玉將將。壽考不忘。」（終南）といつてをる。衞人が武

公の德を頌しては

「瞻彼洪奥、綠竹猗猗。有匪君子。如切如磋。如琢如磨。瑟兮僩兮。赫兮咺兮。有匪君子。終不可諼兮。」洪奥

と述べてをる。共に君德を稱揚して永く忘れぬのである。大雅の「靈臺」には

經始靈臺。經之營之。庶民攻之。不日成之。經始勿亟。庶民子來。王在靈囿。麀鹿攸伏。麀鹿濯濯。白鳥翯翯。王在靈沼。於牣魚躍。

とある。上の土木工事に引き立てられるのは苦痛に感じさうなものであるが反對であつて、上は別に急ぎもせぬに子來の民が澤山集まつて來、瞬く間に作り上げた。その成れる後に喜ぶのは君臣のみならず、禽獸魚鼈まで各其の所を得て滿足してをる樣が眼前に躍如としてをる。是れ等は君主に對する純情であつて、君に事へるのには、かかる心から出發せねばならぬ。

何人も天職を有つてをる。各人其職場に在つて最善の努力をせねばならぬ。前述の如き純情から發すれば、其の職務に對する觀念は實に旺盛となるのである。「自古在昔。先民有作。溫恭朝夕。執事有恪。」那「繼戎祖考。無廢朕命。夙夜匪解。虔共爾位。」韓奕「百辟卿士。媚于天子。不解于位。民之所堅。」假樂「嗟爾君子。無恒安處。靖共爾位。正直是與。神之聽之。式穀以女。」小明「尹氏大師。維周之氐。秉國之均。四方是維。天子是毗。俾民不迷。」節南山　等は皆職を執るの心掛を述べたものである。而して之を實行するのは容易の事ではないから、同列互に警告して相勵ましてをる。小雅「民勞」は序說には召穆公が厲王を刺つた詩であるといつてをるが、朱熹は「同列相戒之詞」と斷じてをる。五章より成るが首尾の二章を擧げることにする。

民亦勞止。汔可小康。惠此中國。以綏四方。無縱詭隨。以謹無良。式遏寇虐。憯不畏明。柔遠能邇。以定我王。　民亦勞止。汔可小安。惠此中國。國無有殘。無縱詭隨。以謹繾綣。式遏寇虐。無俾正反。王欲玉女。是以大諫。

最後の二句に相戒勵する意味が躍如としてをる。第二章の終に「無棄爾勞。以爲王休。」とある。從前の功勞を殞さず勉めて王の休美をなせと激勵するのである。之に次ぐ「板」の首章に

上帝板板。下民卒癉。出話不然。爲猶不遠。靡聖管管。不實於亶。猶之未遠。是用大諫。

とある。序には凡伯が厲王を刺つた詩としてをるが、朱熹は前篇と相類すとしてをる。同列相戒むるに善を以てするの一斑を知ることが出來る。隨つて同僚の勤勞に對しては我が事の如く喜び、之を賞讃推奬して措かぬ。「崧高」「烝民」等がそれである。「崧高」は八章每章八句より成り、周の宣王の舅申伯が、王室に大功あつたので、王は之を謝邑に封じ、召伯をして居城を作らしめ、

其の封域を定めて賦税を正さしめ、路車乘馬介圭を賜うて南方諸侯瞻仰の中心たらしめたるを、同列の尹吉甫が頌揚したる詩である。申伯は崧嶽が神靈の和氣を降して生んだ者で、其の德は柔惠にして且つ直く、萬邦を揉めて四方の國國に著聞し、實に周室の楨幹藩屏であり、文武の士是に憲ると稱揚してをる。「烝民」も八章毎章八句より成り、宣王が仲山甫に命じて齊に築城せしめたる時、尹吉甫が送つた詩である。仲山甫は上天が天子を保んずるために生まれさせた者で、其の德は柔嘉にして則あり、威儀顏色を善くし、小心翼翼として古訓に式り、明哲身を保ち、夙夜懈らず上御一人に事へ、柔なるも茹はず剛なるも吐かず、矜寡をも侮らず彊禦をも畏れず、德を舉ぐる輶きこと毛の如く、衮職闕くるあれば之を補うた。夫故王は之に命じて諸侯の模楷とし、王言を出納し政を外に賦き四方を經營せしめ、新に命じて東方に城かしめることとなつた。乃で誦を作つて其の心を慰めるとある。以て全貌を窺ふことが出來よう。

一一　詩と外交

論語に「子曰。誦詩三百。授之以政不達。使於四方。不能專對。雖多亦奚以爲。」子路とある。詩は人情の機微を歌つたものであるから、善く之を學べば、內治外交往くとして可ならざるなき

筈である。然るにそれが出來ぬならば、所謂論語讀みの論語知らずで、何の役にも立たぬと申すのである。上揭の如く詩は溫敦を旨とし、其の發表法は諷諭諫諫を主としてをるので、外交上の用語として極めて適好である。之を諷誦するのみならず之を管絃に被するを以て、融融和樂の間に應酬して好果を收めることが出來る。春秋左氏傳などに古詩を賦して使命を傳へ、又は各自の志を言へることが澤山見えてをる。魯の文公が霸者たる晉國に行き盟を尋めて歸ると、衞侯と鄭伯とが各々之を途に要し、自國と晉國との國交が疏隔してをるので、その取成しを文公に願つた。鄭伯が文公を饗した際の光景を左の如く敍してをる（左氏文公十八年）「鄭伯與公宴于棐。子家賦鴻雁。季文子曰。寡君未免於此。文子賦四月。子家賦載馳之四章。文子賦采薇之四章。鄭伯拜。公答拜。」鄭伯が文公を棐に饗した。鄭の大夫子家は「鴻雁」の詩「鴻雁于飛。肅肅其羽。之子于征。劬勞于野。爰及矜人。哀此鰥寡。」首章を歌つた。其の意は侯伯が鰥寡を哀恤して征行の勞に服する意に取り、鄭國は寡弱なれば、魯侯が之を恤み、再び晉に行き鄭のため斡旋せんことを請ひ、「鴻雁」を鄭伯に「之子」を魯侯に比した。之に對して魯の大夫季文子は我が君も同樣に鴻雁肅肅の苦あり、且つ行役すること既に時を踰えたれば、歸國して祖先の祭祀を行ひたしといひ、晉に引還して斡旋するを欲せぬ意をば「四月」の首篇「四月維夏。六月徂暑。先祖匪人。胡寧忍予。」によつて

見した。子家は更に懇望の意を「載馳」の第四章「我行其野。芃芃其麥。控于大邦。誰因誰極。大夫君子。無我有尤。百爾所思。不如我所之。」に見した。即ち「大邦ニ控ゲントスレバ、誰ニカ因リ誰ニカ極ラン」の二句を以て魯侯に依るの外方法なきことを懇請したのである。女子はかくまでに懇望せらるるからには、及ばずながら犬馬の勞に服せんとの意を「采薇」の第四章「彼爾維何。維常之華。彼路斯何。君子之車。戎車既駕。四牡業業。豈敢定居。一月三捷。」の「豈敢定居」によつて見した。鄭伯は其の辱きを拜し、文公は之に答禮したといふのである。此の短文の裡に、兩國の君臣が樽俎に折衝する光景が躍如としてをり、疎疎たる詩句が千言萬語の熱辯にも優るを認めざるを得ぬ。又成公九年に「夏季文子如宋致女。復命。公享之。賦韓奕之五章。穆姜出于房再拜。曰。大夫勤辱。不忘先君。以及嗣君。施及未亡人。先君猶有望也。敢拜大夫之重勤。又賦綠衣之卒章而入。」とある。季文子が魯の公女伯姬の婚儀を主り、伯姬を宋國に送致して大任を果したるを復命したので成公は慰勞の宴を賜うた。文子は「韓奕」の第五章「蹶父孔武。靡國不到。爲韓姞相攸。莫如韓樂。孔樂韓土。川澤訏訏。魴鱮甫甫。麀鹿噳噳。有熊有羆。有貓有虎。慶既令居。韓姞燕譽。」を歌うて伯姬の所を得たるを慶祝した。大意は、蹶父其の女韓姞のために緣づくべき國を選んだが、韓國の樂土に及ぶものはない。韓國は水陸の產物豐富であるので、「慶ンデ既ニ令ク居リ、韓姞燕ンジ譽ム」といふのである。文子は成公が蹶父の德あり、宋公は韓侯の如く、宋國は韓土の樂しきが如く、伯姬の令居燕譽韓姞の如くなるを頌したのである。伯姬の母穆姜別室に在つて之を聽き喜悅に堪へず、出でて再拜して文子の勞を謝すること慇懃懇切、綠衣の卒章を賦して內に入つた。「絺兮綌兮。凄其以風。我思古人。實獲我心。」の下の二句が穆姜喜躍の情を寫すに確當不易である。女を嫁して其の所を得たる母氏滿悅の神情を描寫して、眼前に躍如たらしむるもの、此の二詩無限の神韻が與つて力あることを閒却することは出來ぬ。襄公二十六年には、衞侯が晉に執へられたので、齊侯・鄭伯が放免を請ふために晉へ行つた。晉侯は二人を兼ね饗し、「嘉樂」を賦した。即ち「嘉樂君子。顯顯令德。宜民宜人。受祿于天。」とあるから、齊鄭二君を之に比して美めたのである。齊の國子は齊侯を相けて「蓼蕭」を賦した。其の詩は四章、每章六句より成るが、共に長大なる蕭に零露がしつとりと宿つてをるに興し、君子の德により太平の澤が四方に及べるを頌した詩である。之を引いて晉侯を美し、併せて衞侯も露澤の內にあることを望んだ。子展は鄭伯を相けて「緇衣」を賦した。其の中に「子ノ館ニ適キテ、還ルトキ予、子ノ粲ヲ授ケン」とある。これ晉君に違遠せぬ意を寫した。叔向は晉君に告げて二君を拜せしめ、希望には副ひ難き意を寫した。國子は晏平仲をして叔向に私語せ

しめて、晉君は其の明德を諸侯に宣べ、其の患を恤へて其の闕を補ひ、其の違を正して其の頽を治むるのが盟主たる所以である。然るに晉國は臣のために君を執へたのは如何であらうかと曰はせた。叔向が趙文子に告げ、文子が晉侯に告げた。乃で晉侯は衞侯の罪を言ひ、叔向をして二君に告げさせた。すると國子は「轡之柔矣」を賦した。此は逸詩であるが周書に見えてをる。國子は政を寛にして諸侯を安んずること、柔轡もて剛馬を御する如くせよとの意に用ゐたものと見える。子展は「將仲子兮」を賦した。其の詩は三章共に、父母の言、諸兄の言、人の多言の畏るべきを述べてをる。されば衞侯は別に罪があるにしても、衆人は矢張り晉は臣のために君を執へたと謂ふであらうから、嫌疑を避けられよと諷したのである。晉侯は乃で衞侯を歸らせたとある。晉君と齊鄭の大夫が共に詩を以て其の意を見した。三篇の詩を奏すると樂が相當に長く續くので、懇望を拒絶された際、直に詩を以て懇願せず、拒絶の理由を私的に問はせたる後更に詩を以て放免せらるべきを述べた。此の詩と私語との配合が變化の妙を盡してをり、當時の情景が目に覩る樣である。晉の趙武が鄭に行つた時、鄭伯が之を饗し、鄭の七大夫が陪席した。武は七子に對し、古詩を賦して其の志を見さんことを請ひ、七子が各〻詩を賦すると、武はそれに就いて一一挨拶し、又感想をも述べてをる。饗宴が終ると武は叔向と共に、賦詩によつて七子の人物を批評し、

又其の人の將來に就いて豫言してをるが的中してをる。襄公二十七年　斯の樣に用ゐられた詩が左傳中に六十餘篇も見えてをる。三百餘篇の限ある詩で、人事萬般の用に供せうとするのであるから、それを活用せねばならぬ。乃で斷章取義が起る。章を斷つて新しき意義を取ることで、原作の意を翻案して當面の事に引當てるのである。孟子も「說詩者。不以文害辭。不以辭害志。以意逆志。是爲得之。」萬章上といつてをる。されば詩は活用せねばならぬ。子貢や子夏が詩を活用して、孔子に稱揚されたことは論語に見えてをり、又大學・中庸・孟子等に平淡な詩の句を引いて、高遠な道を說いてをるのも周知の事である。されば各國の使臣が饗宴歡樂の際、詩を賦し樂を奏するが、必ず寓意のあることで、それを解し得ぬ者は士君子に齒せられぬ。詩の活用の手際によつて人物を甄別するのであるから、人人之に特に力を入れた。齊の慶封が魯に來聘した時、叔孫穆子が之と會合した所が不敬であつたので、穆子は「相鼠」を賦して之を刺つた。(「相鼠有皮。人而無儀。人而無儀。不死何爲。」とある。)然るに封は無關心でゐたので、左傳に「亦不知也」と貶してをる。襄公二十七年　明年封が來奔した時、穆子が復た會食した所が不恭の事があつたので、樂師をして「茅鴟」を誦せしめた。此は逸詩であるから今知るに由ないが、不恭を刺つた者であらう。然るに「亦不知」と極印を捺された。左氏が二度まで「不知」と書したのは、その頑冥不靈、厚

顔無恥、眞に度し難き人間であるとしてをることが、十分に看得出來る。當時使臣が外國に使するには、命を受けて辭を受けぬ。その應對は專斷にてなすべきである。それが出來ぬ樣では、如何に多く詩を學んでもその甲斐はない。故に孔子は「雖多亦奚以爲」と申されたのであらう。

一二　詩と自然

論語に「多ク鳥獸草木ノ名ヲ識ル」（前掲）とある如く詩には自然物が非常に多く歌はれてをる。支那は農業立國であり、漁獵を副業とした關係上當然の事であるが、自然物を同胞の如く親しんでをる。「五月斯螽股ヲ動カシ、六月莎鷄羽ヲ振ヒ、七月野ニ在リ、八月宇ニ在リ、九月戶ニ在リ、十月蟋蟀我ガ牀下ニ入ル。」（七月）などは其の一例である。小雅に

維天有漢。監亦有光。跂彼織女。終日七襄。雖則七襄。不成報章。睆彼牽牛。不以服箱。東有啓明。西有長庚。有捄天畢。載施之行。維南有箕。不可以簸揚。維北有斗。不可以挹酒漿。維南有箕。載翕其舌。維北有斗。西柄之揭。（大東）

とあるが如きは、天體を觀て其の名に相應せぬを怨み、甚しきは箕星は其の舌を引いて我を呑噬するが如く見え、斗星は柄を西に揭げて東方の我等を汲み取るが如く見ゆとて恐怖をなしてをる。併しこれも自然物を敵視し若しくは畏怖したのではない。「大東」は東方諸國が不公平なる賦役を課せられ、困苦の極に達せるを訴へたる怨詩である。怨恨の情を訴ふるに處なく、日頃親しみ瞻仰せる星辰を呼び、我等に對し何故かく傍觀しをるか、其の名に相應はしからぬではないかと且つ訴へ且つ責めたのであつて、「小弁」の怨と同樣に見るべきであらう。天體に就いても斯の如くであるから、草木禽獸蟲魚に對しては更に多く見えてをる。三百篇に散見せる名は草百十七、木六十三、禽四十五、獸七十一、蟲三十二、魚十七である。試みに詩の題名について檢するに、國風の首なる周南・召南の二十五篇中、禽に關する者が「關雎」「鵲巢」の二篇、獸に關する者が、「兎罝」「麟之趾」「羔羊」「野有死麕」「騶虞」の五篇、蟲に關する者が「螽斯」「草蟲」の二篇、草に關する者が、「葛覃」「卷耳」「芣苢」「采蘩」「采蘋」の五篇、木に關する者が「樛木」「桃夭」「甘棠」「摽有梅」の四篇、天文氣象に關する者が「行露」「殷其靁」「小星」の三篇、地理に關する者が「漢廣」「汝墳」「江有汜」の三篇、合計二十四篇は皆自然に因んだ者である。但「何彼穠矣」のみは何れにも屬せぬが、これも唐棣の華を形容した語であるから、木の中に入れても餘り不都合とは思はぬ。されば二南の題名は全部自然物から取つたといつても差支ない。十三國風以下はこれ程でもないが、矢張り相當に多く用ゐられてをる。但し頌には妙な題目が多いから例外とせ

ねばならぬ。左に幽風「七月」の一篇を掲げて自然に親しんだ詩の一斑を窺ふこととする。

七月流火。九月授衣。一之日觱發。二之日栗烈。無衣無褐。何以卒歲。三之日于耜。
四之日舉趾。同我婦子。饁彼南畝。田畯至喜。七月流火。九月授衣。春日載陽。有鳴倉
庚。女執懿筐。遵彼微行。爰求柔桑。春日遲遲。采蘩祁祁。女心傷悲。殆及公子同歸。
七月流火。八月萑葦。蠶月條桑。取彼斧斨。以伐遠揚。猗彼女桑。七月鳴鵙。八月載績。
載玄載黃。我朱孔陽。爲公子裳。四月秀葽。五月鳴蜩。八月其穫。十月隕蘀。一之日于
貉。取彼狐狸。爲公子裘。二之日其同。載纘武功。言私其豵。獻豜于公。五月斯螽動股。
六月莎雞振羽。七月在野。八月在宇。九月在戶。十月蟋蟀入我牀下。穹窒熏鼠。塞向墐戶。
嗟我婦子。曰爲改歲。入此室處。六月食鬱及薁。七月亨葵及菽。八月剝棗。十月穫稻。爲
此春酒。以介眉壽。七月食瓜。八月斷壺。九月叔苴。采荼薪樗。食我農夫。九月築場圃。十
月納禾稼。黍稷重穋。禾麻菽麥。嗟我農夫。我稼既同。上入執宮功。晝爾于茅。宵爾索綯。
亟其乘屋。其始播百穀。二之日鑿冰冲冲。三之日納于凌陰。四之日其蚤。獻羔祭韭。
九月肅霜。十月滌場。朋酒斯饗。曰殺羔羊。躋彼公堂。稱彼兕觥。萬壽無疆。

此の詩は周公旦が甥の成王を戒めるために作つた者だといはれてをる。成王十四世の祖なる公劉が國を豳（陝西省栒邑縣西）に立てて德政を敷き、上下よく親和したる狀態を敍してをる。先づ陰曆七月大火星が昏時に南天より少し西に傾いて出ると之を見て涼氣立つ時候と知り、九月には更衣をせねばならず、陽曆一月には觱發と風寒く、同二月には栗烈と氣寒くなるので、衣は勿論毛布の用意をさすのである。なくば寒中を無事に經過することは出來ぬと申すので、星辰を觀て衣服の用意をさすのである。更に食物に就いては其の源なる農業に留意し、陽曆三月にもなれば、冬籠せる邑居を出でて農園に行き、農具の修理やら諸般の準備をなし、四月には田畝の耕作に取り掛り、丁壯は皆力役に從事し、女子供は辨當を作つて農園に行き、一家團欒して食事を攝り、農事監督者もこの光景を見て共に喜ぶことを述ぶ。これが首章の大意で、一家の輯睦、上下交驩の狀が眼前に躍如としてをる。第二章は女子蠶桑の務を敍したものである。春暖の候ともなれば、女子は巧鶯の聲を耳にしつつ、籠を攜へて桑の若葉や蘩を摘取して蠶を養ひ、其の中には公子に許嫁して近く父兄に離れねばならぬ少女が、一旦歸嫁したる後は今日の如く此の野の自然に親まれぬを思ひ、傷悲の情に堪へぬ狀景を敍したもので、風俗敦厚、上下忠愛の實が十分に窺はれる。而もそれが春光麗かなる野に於て、鶯を聽き桑葉を採るといふ自然を介してである。第三章には更に衣服の事を敍す。八月葦の成熟せるを待ち之を刈取り、來春養蠶に用ゐる曲簿の材料とし、蠶兒成育するに從ひ柔

桑を摘む位にては閑に合はず、斧を携へて大枝の遠く揚れる者を伐り來り、小枝は枝ながらに摘取して空坊主にすることなどを述べて、蠶事をその食料たる桑によつて敍し了る。又七月には鵙が鳴き始める。翌八月には麻が成熟するので、其の纖維を績して布を作り、或は黒く或は黄に染め上げる。就中朱に染めたるは殊に鮮明であるから、公子の裳に獻上しようといふのである。桑麻蠶績の事を敍してをるが、養蠶に就いては室内の勞作は更に言はず、食料たる桑によつて述べ麻を績するには先づ鵙を出してをる。徹頭徹尾自然を離れず、情味の掬すべきものがある。第四章も主として衣服の事卽ち裘について敍す。純陽四月には蕈草秀で、五月には蜩が鳴き始め、八月には早禾を刈り、十月には草木落葉する。と時候の變を草蟲禾によつて敍し、祁寒となれば絹麻布にては凌ぎ切れぬ。乃で陽曆一月には貉を捕へて裘の材料とし、狐狸の上等品は公子の裘とし、二月には全部勢揃ひして狩獵をする。獲物の中三歳の大猪は公に獻じ、當歳の小猪は我が有とする。忠愛奉上の純情は各章に瀾漫してをる。第五章は冬籠の準備卽ち住居の事を敍す。仲夏五月より初冬十月に至る季節の變を小蟲によつて敍し、更に冬籠の爲に室内の空隙を塞ぎ、鼠を熏べて驅除し、北窗を塞いで朔風を防ぎ、戸を塗つて寒氣を禦ぎ、一家眷屬安らかに年越しをするのである。第六章は食物のことを敍す。六月には鬱（棣の屬）と薁とを食ひ、七月には葵と菽と

を烹、八月には棗を擊ち、十月には稻を穫り、酒を釀造して長壽を助ける。又七月には瓜を食ひ、八月には壺を取り、九月には苴を拾ひ、荼を採り樗（惡木）を薪として農夫達を養ふを述ぶ。果酒や嘉蔬は老人を養ひ病人に供し、又賓客祭祀に奉じ、瓜瓠苴荼は平常の食用とするのである。第七章は禾稼の收穫及び家屋の修理に就て述ぶ。九月には收穫のために野菜を植ゑたる圃をば築き堅めて場となし、十月になつてその場に禾稼を納れる。黍や稷や早稻や晩稻や禾麻や菽麥や、凡ゆる農作物が全部收穫された。春夏秋三時の收穫が全く終つたから、都邑に入つて宮室家屋を葺治する事を執り行はねばならぬ。晝は葺草のために茅を刈れ、夜は繩をなへ。早く屋根に乘つて家の修理なり葺換へをするがよい。其の内に百穀を播種する春になるぞ。と申すので、呂氏が「此ノ章ハ農事ヲ終始シ以テ憂勤艱難ノ意ヲ極ム」と評した如くである。第八章は氷藏め氷開きの事から、老少共に公堂に會して報謝慰勞したるを敍す。陽曆二月に冰を山より斬り出し、三月には氷室に納め、四月の早朝に羔を獻じ韭を祭つて後氷開きをする。九月には嚴霜が降り、十月には農事畢つて場地を掃除し、兩樽を置き竝べて宴を張り、羔羊を殺して料理し、君の堂に升り酒杯を擧げて彊りなき壽を頌するといふのである。一篇の中、天體を始め、草木嘉穀蔬菜禽獸蟲豸の類を敍すること極めて多く、自然との交渉の如何に緊密なるかが知られる。卽ち節物の大要

と歳序の變遷とを陳べ、人事の時に及ぶべきを極言してをる。而して其の閉君臣上下の交驩父子兄弟の團欒を敍して遺蘊なく、忠愛の誠、溫敦の情、躍躍として人に迫る者がある。王氏が「仰觀星日霜露之變。俯察昆蟲草木之化。以知天時。以授民事。女服事乎內。男服事乎外。上以誠愛下。下以忠利上。父父子子。夫夫婦婦。養老而慈幼。食力而助弱。其祭祀也以時。其燕饗也以節。此七月之義也。」といひ。輔氏が「以介眉壽。祝其親也。萬壽無疆。祝其君也。周之先公。以農桑教民。而使民給足於衣食。然未嘗以爲惠也。周之民亦自力於農桑之事以樂其生。至於歳終休暇之時。則殺羊爲酒。祝君之壽。以致其尊君親上之誠。亦未嘗以爲是足以報其上也。上以誠愛下。下以誠事上。而兩不知其所以然。此所謂皡皡如也。」といへるは。能く此の詩の華を咀ひ英を含める者と謂ふべきであらう。眞德秀は更に「農者衣食之本。唯其關生民之大命。是以服天下之至勞。今以此詩考之。是其心無一念不在乎農也。一歳之閒。無一日不專乎農也。一家之內。無一人不力乎農也。近世張栻入侍經筵。言周公之告成王。見於詩有如七月。見於書有如無逸。欲其知稼穡之艱難。與小人之依。帝王所傳心法之要。端在於此。其論最爲懇至。臣愚不佞。願詔儒臣。以今農夫紅女。耕蠶勞勤之狀。作爲歌詩。退朝之暇。使人日誦乎前。且繪畫成圖。揭之宮掖。布之戚里。庶幾聖心惕然。不忘小民之依。而六宮嬪御。外戚近屬。亦知衣食所自來。而不狃侈汰之習也。」と極言してをる。唯一篇の詩で此の如く博く教化に資せられるのは類が少いであらうと思はれる。周公の作と稱せらるるも故なきに非ずと信ずる。

一三　結語

以上詩と教化とに就いて考察したのであるが、詩の內容を分析的にある看點から眺めたに過ぎぬ。更に幾多の方面から吟味される譯である。併し紙面の關係上此の邊で擱筆せねばならぬ。詩の生命は朗誦し諷詠し謳歌し、金石絲竹に播し手舞足蹈に至るに在るので、その教化に及ぼす影響も、かくして始めて全きものである。朱子も「讀詩之法。只是熟讀涵泳。自然和氣從胸中流出。其妙處不可得而言。不待安排措置。」（朱子語類卷八十）といつてをる。詩は一應其の意義を領得したならば、熟讀涵泳して詩と融合同化することが必要である。かくして始めて溫柔敦厚の氣が中より自然湧き來るのである。智的に其の內容を知るだけでは效果は薄いと思ふ。現今教育の弊は、事物の內容を分析して之を知るを以て能事畢れりとすることに在りはせぬかと思ふ。これも一方法に相違ないが、かかる遣り方では眞相は捉へ難い。教化は智を先きとするが、眞に其の人を動かすは情の力に待たねばならぬ。化は人を感ぜしめて前よりも善い形に作り易へることであるから、

それには智情意が一時に働く様にせねばならぬ。卽ち事物を分析的にのみ見ず、總體として領得せねばならぬ。それには熟讀諷詠、優柔厭飫させる必要がある。この點よりすれば昔の素讀より入る教育法に捨て難い美點を認める。今日動もすれば一時的の早判り法卽ち巧速主義を可とする者がないでもないが、これは往往にして小賢しい輕薄才子を作ることになる。この弊を矯めるには、其の失は愚である所の溫柔敦厚の教を敷き、子弟の生涯を考へ、反覆熟讀して總體を把握せしむる拙遲の方法を取ることが適當ではあるまいか。

昭和十八年十二月二十日印刷
昭和十八年十二月二十五日發行

出版會承認
い310586
500部

詩と教化　定價　金七十錢
特別行爲稅相當額　金八錢
合計　金七十八錢

著者　加藤虎之亮

發行者　東京都小石川區原町東洋大學
廣井辰太郎
會員番號二二〇一〇二

印刷者　東京都小石川區原町十二番地
加山守也
會員番號東東一四三九

配給元　東京都神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所　東京都小石川區原町一七番地
東洋大學出版部

443
191

終